



TOHOKU
UNIVERSITY



DIVISION OF AREA STUDIES

DIVISION OF INTERCULTURAL
RELATIONS

DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

RESEARCH CENTER FOR LANGUAGE,
BRAIN AND COGNITION

| 2013年 入学者用 |

東北大学大学院

国際文化研究科案内 2012-2013

GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY

CONTENTS

01	研究科長からのメッセージ
02	国際文化研究科の理念・目的
03	国際文化研究科のアドミッションポリシー
04	国際文化研究科の特色と構成
05	国際地域文化論専攻
11	国際文化交流論専攻
19	国際文化言語論専攻
24	附属言語脳認知総合科学研究センター
25	言語総合科学コース
26	「ヒューマン・セキュリティと社会」プログラム
27	研究科開講授業科目と担当教員
28	平成24年度入学者選抜状況 出身大学別
29	国・地域別留学生数 派遣留学生数
30	修士論文題目 博士論文題目
32	修了後の進路について
33	奨学金について

国際文化研究科とは

国際文化研究科は、世界諸地域の文化、それら地域間の相互交流、各地域文化の基礎をなし、また相互交流を媒介する言語という三つの領域において学際的・総合的な教育・研究を推進し、世界を舞台に活躍する優れた人材を輩出することを目的として設置された博士課程前期2年の課程ならびに博士課程後期3年の課程からなる大学院です。

本研究科は平成5年に国際地域文化論専攻ならびに国際文化交流論専攻を擁して発足し、その後平成13年には国際文化言語論専攻を新たに設置して、人類社会の言語的・文化的・社会的な多元性を踏まえた新たな研究・教育を展開してきました。さらに平成19年度には、多様な成果をあげて満期終了した21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」の活動を継承・発展させるため、「言語脳認知総合科学研究センター」が本研究科附属施設として加えられました。現在、これら三つの専攻と一つの附属センターが、有機的に関連しあいながら、上記の目標達成に向けた教育・研究を鋭意推進しているところです。

今日、人類が直面している問題の多くは、国境・民族・人種を超えた複雑性を孕んでおり、その解決のためには新たな知の枠組みを創造することが求められています。このような現代人類社会の要請に応えるために、本研究科では従来の人文・社会・自然科学の伝統的概念や方法の枠組みを超えた総合的・学際的・先駆的な研究を推進しています。これらの研究成果を背景に高度な専門的知識と国際性を兼ね備えた有能な研究者や職業人を養成することが、本研究科の最大の使命となっています。



研究科長からのメッセージ

東北大学大学院国際文化研究科長

小林 文生

東日本大震災から1年。いつもとは異なる意味を持つ時間を経て、本研究科も新たな年度を迎えます。

建物の損傷によって、日常の教育研究活動に相応の影響が生じたのは事実ですが、研究科の教職員と学生が
一丸となってそれを克服しようと努力する日々が今に至るまで続き、研究科は元気を取り戻そうとしています。

震災から2ヶ月後の研究科入学式で、私は新入生の皆さんに、今このようなときに自分がなぜこの研究に取り
組むのかを自覚的に自問してほしいと述べました。そして、そうすることによって、このような歴史的
大災害と正面から向き合って、各自が苦悩しながら、研究対象と自分自身とのつながりを考察し表明することが大切だと述べ
ました。私たちが置かれていたのは、きわめて特殊な状況であったとも言えますが、今思えば、じつはそのとき私た
ちの一人ひとりが、最も本質的で普遍的な何かに触れていたのではないのでしょうか。

その後も、研究だけではなく、生活のすべての場面において、皆が今自分は何を為すべきか、何ができるのか
と問い続けて、今日に至っています。身近な日常から、世界情勢に至るまで、どのような視点を持って見つめるべ
きなのかを問い、様々な視点が存在することを確認し、その視点の持ち方しだいで対象の見え方が異なってくる
ことを知る。それは、研究を進めるための前提とも言える基本姿勢であり、あらためて言うまでもないことかもし
れませんが、去年の経験は、そのような意味では、各自の生き方と研究のつながりを否応なく意識させられる機
会だったと思います。

そのような環境にある国際文化研究科で進められている研究と教育の基本姿勢は、学際的、総合的というキー
ワードにこめられています。絵に喩えるなら、通念に従ってふつうに見えているさまざまな対象を、新たな筆致で
描き直してみることと言えるでしょう。当たり前前に存在していると思い込んでいた「線」が、実はどこにも存在しな
いものであり、各自が描き出して初めて存在するのだという事実を把握すること。皆の目に同じように見えてい
るとされる「常識」をあえて捨象して、新たな輪郭を提示する作業。それをするためには、もちろん、多くの先人た
ちの描き方を模倣するという研鑽を積むことが前提ですが、その際に、とくに複数の対象の「あいだ」に着目し、そ
れに基づいて新しいつながりを発見し、ないしは築くこと。その面白さが国際文化研究の魅力であり醍醐味であ
ります。

そして、これからの国際文化研究で大切なのは、「国際international」という言葉が持つ意味を「国nation」とい
う概念だけに限定せずに、もっと広くさまざまな「際inter」に着目することです。3つの専攻すなわち国際地域文
化論、国際文化交流論、国際文化言語論のいずれにおいても、そのような領域横断的な視点に基づいて、先端的
研究プロジェクトが積極的に推進されています。

グローバル化ということが言われて久しくなりますが、世界を規定しようとするそのような言葉に向き合うとき
は、さまざまに疑ってみる力が必要です。世界の複雑化と単純化は表裏一体であり、そこにいる私たちは、さまざ
まな角度から対象を相対化する視点を持つ必要があります。例えばパスカルが「考える葦」という表現で示した人
間観、それは、世界と人間との関係を、ミクロとマクロの絶えざる反転という目眩く宇宙的な視線から描き出した
ものであり、大津波を前にして呆然とするしかない私たち現代人を勇気づける叡智です。

学問の究極の目的は、人間の幸福、世界全体の幸福にあります。高い志のある多くの学生の皆さんとともに、
今、ここでしかできないこと、ここだからこそできることを目指して一緒に歩むことを、心から楽しみにしています。

国際文化研究科の理念・目的

東北大学大学院国際文化研究科 (Graduate School of International Cultural Studies) は、平成5年(1993年)4月1日、東北大学の全学的改革の一環として、本学における最初の独立研究科として設立されたものである。本研究科の設置目的は、国際的な地域文化、文化交流及び言語文化に関する学際的かつ総合的な教育・研究を行い、国際化の進展に対応して我が国の内外で活躍し、国際貢献を担いうる優れた人材を養成することにある。

経済活動の国際化や国家を超えた大規模な人的交流の進展は、人々の国際的な相互理解を深めるプラス面とともに、時として、地域や国家間の深刻な文化的・経済的な摩擦や対立を招きかねないというマイナスの面をも含みもっている。国際的な種々の摩擦や対立は、関係諸国間の人々の言語や思考様式の違いばかりではなく、歴史や文化、宗教、自然観などに対する無理解に起因している場合も多く、それが嵩じたときには、紛争や混乱にまで発展しかねない。不幸なことに、現在でも、宗教的・文化的な不寛容や無理解に起因する民族紛争や地域紛争が後を絶たない。世界がますますグローバル化・ボーダレス化していく21世紀にあつて、我が国がより質の高い国際的交流・協力を築いてゆくためには、諸外国の言語や文化、歴史の理解はもとより、国際的な交流や協力の意義、それに内在する諸問題をも深く理解し、かつ高度の専門的知識を有する研究者や実務者を養成することが根本的に重要な課題となっている。本研究科は、そのような見地から教育研究を行い、狭い専門分野に閉じこもらない創造的な研究者を育成すると同時に、幅広い視野に立つ国際性を身につけた高度専門職業人を養成することを目指していかねばならない。

高度情報化に伴う国際化の時代にあつて、世界は文化的にも経済的にも急速に一体化する傾向を露にしている。各地域の文化は、それに固有な歴史を背景として形成・発展し、独自の文化的特徴を持ちながらも、多文化間の相互交流を通じて自他の文化を融合させ、変容を遂げていく。このように変容した文化を「国際文化」と呼ぶならば、「国際文化」研究とは、「各地域文化の形成・発展・交流についての過去、現在、未来を現代における国際的一体化の視点から総合的・学際的に考察する学問分野である」と定義されうる。文化の定義はきわめて多義的であり、言語や宗教、思想、文学、芸術はもとより、歴史や社会、自然観、科学・技術、経済諸活動、教育、生活様式まで包含されよう。しかし、国際文化研究はそうした個々の問題を単に個別の事実としてとらえるだけではなく、世界の様々な地域に生活する人々の生き方や行動様式に、そうした個々の問題がどのような影響を与え、どのような文化を形成するのに役立ったかなど、現代につながる問題意識と総合的・学際的視点から考察し、文化の多様性・独自性とともな普遍性・共通性を探り、文化の本質的理解を目指さなければならない。複合的あるいは重層的な構造を持つ国際文化の研究には、人文・社会・自然科学の諸分野に対応する個別専門分野の伝統的な方法論や概念といった枠組みを超えた、新しい学問の思考法、総合的な視野が必要なのである。

学問としての「国際文化」研究は今だ萌芽的な研究段階にある。国際文化研究科は、21世紀現代世界において求められている地域文化・言語・社会構造の解明、異文化間の相互理解、人類の恒久的平和共存のあり方、地球規模の環境・資源問題の解決などの実践的諸課題に応えるためにも、その理論的枠組みを科学的に追及し、常に変容していく国際文化の諸相を的確に捉えることができる新しい学問の確立を目指さなくてはならない。

国際文化研究科のアドミッションポリシー

今日、私たちの社会が直面する問題の多くは、地域、国境、民族、宗教、人種などさまざまな要因が複雑に絡み合った複合的な様相を呈しています。これらの問題を解決するには、伝統的な枠組みに基づく既存の学問研究だけではなく、それらを補完する総合的・学際的な基盤に立つ新しい教育と研究が不可欠になります。

東北大学大学院国際文化研究科は、

- 1** 世界各地域の文化とそれを取り囲む社会の特質を解明する「国際地域文化論専攻」、
- 2** 言語、経済、技術、資源の文理融合型の視点から文化交流の発展の方向を探求する「国際文化交流論専攻」、
- 3** 言語、文化、教育の深い理解と高度な外国語能力を目指す「国際文化言語論専攻」

から構成されています。人文・社会・自然科学という伝統的な学問領域の垣根を超えた総合的、学際的、先駆的な教育研究組織の体制を整えているのが特徴です。

国際文化研究科では、新しい時代に必要とされる新しい教育研究組織である利点を生かして、世界各地域の言語・文化・社会の諸相、世界各地域間の国際交流、現代人間社会の諸問題等に関して学際的・総合的な視点から教育と研究を行います。そして、これらの教育と研究の実践を通じて、人類の文明と文化の継承・発展に寄与するという高い理想を備えた学徒を育てるとともに、高度の専門的知識と国際性を兼ね備え、複合的な問題を内包する現代国際社会において、日本国の内外で活躍しうる職業人や研究者を養成することを研究教育上の目標としています。

国際文化研究科では、以上の教育研究の理念に熱意をもって応えてくれる優れた学生を求めています。本研究科は、日本の大学を卒業される方、既に卒業された方はもちろん、社会の第一線で活躍されている方、世界各国からの留学生に対して開かれています。本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

国際文化研究科の特色

創造性に満ちあふれた人材の養成

本研究科は、人類社会が直面する様々な問題に立ち向かってゆくため、みずから新たな問いを立て、それに挑戦していくことのできる創造性に満ちあふれた研究者や職業人を養成しています。

世界を舞台に活躍できる人材の養成

本研究科は、様々な人々との交流を通じて豊かな体験を積み、十分なコミュニケーション能力を身につける場を提供することを通して、世界を舞台に活躍できる優れた人材を養成しています。

世界と地域に開かれた研究科

本研究科は、世界と地域に開かれた研究科として、社会人・外国人留学生を含む優れた人材の発掘につとめ、個々の学生の研究学習条件に配慮した支援態勢の整備を進めています。

挑戦者精神の尊重

本研究科は、内外の様々な学部や研究科を修了した優秀な学生を受け入れています。新たな学問分野にこれから挑戦していこうとする意欲にあふれた学生にも十分配慮した指導を行っています。

国際文化研究科の構成



国際地域文化論専攻

DIVISION OF AREA STUDIES

専攻分野
(講座)

- アジア文化論
- ヨーロッパ文化論
- アメリカ研究
- イスラム圏研究
- 比較文化論



国際文化交流論専攻

DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

専攻分野
(講座)

- 言語コミュニケーション論
- 国際経済交流論
- 科学技術交流論
- 国際環境システム論
- 言語文化交流論
- 異文化間教育論
- 国際資源政策論



国際文化言語論専攻

DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

専攻分野
(講座)

- 言語科学基礎論
- 多元文化論
- 言語応用論
- 言語教育体系論



附属施設

附属言語脳認知 総合科学研究センター

RESEARCH CENTER FOR LANGUAGE,
BRAIN AND COGNITION

国際地域文化論専攻

この専攻においては、「国際文化」を大きくアジア、ヨーロッパ、アメリカ、イスラム圏などの、地域にわけとらえ、各地域の文化とそれを取り囲む社会の特質を解明することを目的としています。その目的を達成するため、この専攻は、地域研究を主体とする講座で編成されています。専攻全体としては、各地域文化について比較の視点を持ちながら、総合的かつ融合的に研究し、その研究を基盤にして学生の教育を進め、地域文化理解の視点と方法を身につけた人材の育成に当たります。

専攻分野（講座）

● アジア文化論	p.06
● ヨーロッパ文化論	p.07
● アメリカ研究	p.08
● イスラム圏研究	p.09
● 比較文化論	p.10

01

Department of Asian Cultural Studies

アジア文化論講座



講座紹介

21世紀の現在、アジアはもっとも活
力に満ちた世界経済や文化の中心
地として、大きな飛躍の時代を迎えよ
うとしています。

このように急激に変貌しつつあるア
ジアの過去と現在を捉え返し、将来を
展望するために、アジア文化論講座
では、特に中国・朝鮮・日本を中心と
する東アジア文化の特色を、思想・宗
教・文学の領域に重点を置いて、多
文化的な観点から教育・研究を行っ
ています。



芋煮会風景

教員紹介

石川 秀巳 教授

日本文化・日本文学

日本江戸時代後期の「読本」(伝奇的歴史小説)を
研究しています。「読本」は中国小説の圧倒的な影響
の故に成立しましたので、日中の比較文学をも心がけ
ています。近年は、朝鮮の義賊小説と江戸の『水滸伝』
翻案との対比的検討にも関心が向いています。

勝山 稔 准教授

中国文学・中国史学

大学では中国文学、大学院では東洋史学を学びま
した。その経験を生かして中国の宋代から明代の小説
を介して様々な研究をしています。一つのことへ専念し、
探求できるのが大学院の特権です。意欲のある学生の
入学を待っています。

佐野 正人 准教授

比較文学・日本近代文学

主に近代の朝鮮と日本を中心とした比較文学・比較
文化的研究を行っています。東アジアの「近代」とは何
だったのか、その中で国境を越えて移動した人々たちの
群像を辿っていくのが大きなテーマです。文学・映画・
大衆文化といった側面からそのようなテーマに取り組ん
でいます。

工藤 謙太郎さん (博士課程前期2年の課程修了生)

研究室の特徴として、24時間研究できる環境にあるとい
うことです。これにより、家や図書館だとゆっくり研究できない
という不安も解消されます。また、総合演習という科目があり、こ
れはアジア文化論講座の目玉と言ってもいいでしょう。総合
演習はかなり密度が濃く、学生には、論文の向上や自己成長
のためのよい経験となっています。この分野の研究者を目指
すのなら、是非アジア文化論講座に入学して自分を磨いてく
ださい。

STUDENT

在学生の声

VOICE





講座紹介

ヨーロッパは、ギリシア・ローマの古典文化及びキリスト教文化を共通の基盤とした文化的統一を保つと同時に、民族や地域の多様性を尊重しつつ、現代の新たな「一つのヨーロッパ」のあり方を模索しています。

ヨーロッパ文化の研究は、文学・思想・歴史・国制等の個別的分野についても全体的視野に立った観点から遂行されなければなりません。

本講座の特質は、こうした視点からヨーロッパ文化を総合的に研究してその実体を明らかにし、本質を追求しつつ教育を行う点にあります。



院生室の風景 (撮影=穴戸睦雄)

教員紹介

小林 文生 教授

フランス文学・文学理論

現代フランス文学、とくにプルーストやサン＝テグジュペリを中心に、「語り」の様々な機能と様態を考察してきましたが、さらに様々なジャンルの言説を対象として、語る「私」の分析を通して、ヨーロッパ文化の特質の一端を探ろうとしています。

布田 勉 教授

※2013年3月退職予定

憲法・憲法史学

私は、憲法学が専門で、主として1848年及び1850年の憲法（欽定憲法及び修正憲法）下のプロイセンを中心にドイツの憲法や議会法、王室などの家法について我が国の明治期以来の憲法秩序を念頭に置いて比較法史的な研究をしています。

佐藤 透 教授

現象学・哲学的時間論・応用倫理

これまでの主な研究テーマは、哲学的時間論とその関連領域です。時期的にはヨーロッパ近・現代の思想、特に現象学やベルクソン哲学等を題材として考察してきました。また、生命倫理・環境倫理・技術倫理といった現代の倫理的問題にも取り組んでいます。

寺本 成彦 教授

フランス文学・映画と文学

仏文学研究の他に、ヨーロッパにおける映像芸術と文学との関わりについて研究しています。文学作品の映画化、文学作品に見られる映画的手法に着目し、2つの異なる表現媒体が干渉し合い、それぞれに特有の表現様式を達成してきたのか、論考しています。

野村 啓介 准教授

近代フランス史研究

第二帝政期を中心としたフランスの中央・地方関係を多角的に分析しています。近年では、同時代の日仏関係やワインなどの問題にも関心が出てきました。いずれは、ワイン文化をつうじた日仏交流の歴史に迫りたいと考えています。

02

ヨーロッパ文化論講座
Department of European Cultural StudiesSTUDENT
在学生の声
VOICE

粉川 光葉さん (博士課程前期2年の課程)

ヨーロッパ文化論講座の特徴は、自分とは異なる専門分野をもつ先生方・学生から指導や指摘を受けられる点だと思います。私がこの講座で勉強を始めて約2年が経ちますが、この2年間で自分の専門分野内だけでは得ることのできなかった様々な視点を養うことができました。また、院生室はいつでも勉強できる環境にあり、ヨーロッパ各地域の文化を知る機会を持つことができます。研究に専念できる魅力的で最適な環境だと思います。



高橋 梓さん (博士課程後期3年の課程)

ヨーロッパ文化論講座の一番の魅力は、「ヨーロッパ文化」を共通の関心とする様々な専門分野の教員・院生が所属していることだと思います。「演習」という全員参加のゼミでは、他分野を専門とする教員・院生からの指摘を得られるため、既存の学問の枠組みを脱した広い視点で自分の研究を捉え直すことができます。ゼミの時間だけでなく、院生室での日常会話もまた学際的な議論に発展することが多く、刺激を受けることが多い毎日です。

03

Department of American Studies

アメリカ研究講座



講座紹介

本講座は、アメリカ合衆国の歴史・社会・文学・文化を広く学際的観点から教育・研究することを目指します。従来の我が国のアメリカ研究は個別の専門領域ごとになされてきましたが、本講座では専門を異にする複数の教員および外国の研究者との連携のもとに研究指導をおこなっています。すなわち、多様な観点からの考察を可能にする教育環境のなかで、新たな合衆国像を構築することが目標です。



講座授業風景

教員紹介

竹中 興慈 教授

※2013年3月退職予定

アメリカ社会史・黒人史

20世紀初頭のシカゴ黒人ゲートの成立問題、黒人と女性に集中する現代アメリカの貧困問題、白人意識の構築問題、北部初の連邦下院議員オスカー・デブリースト研究。最近、黒人奴隷のキリスト教受容について調べています。

小原 豊志 准教授

アメリカ政治史

19世紀のアメリカ政治史を専門にしています。とくに南北戦争前後の時代の選挙権問題を「人種」の観点から再検討することによって、アメリカ民主主義の本当の姿を明らかにしたいと考えています。向学心にあふれた学生との出会いを楽しみにしています。

澤入 要仁 准教授

アメリカ文化・比較文化

19世紀アメリカの大衆文学や大衆音楽、大衆美術などに興味を持っています。現代の大衆文化の多くは、19世紀にその原型が完成されたからにほかなりません。若々しい気概にあふれた学生たちと、若々しい議論を交わしながら研究を進めています。



STUDENT

在学生の声

VOICE

目黒 志帆美さん

(博士課程後期3年の課程)



私は7年間、テレビ局で報道の仕事をしていましたが、一つのことをじっくりと研究したいと思い、本大学院に入学しました。取り組んでいる研究テーマは、ハワイの伝統舞踊であるフラの歴史です。アメリカ研究講座には様々な研究を行う先生や先輩がいらっしや、熱心に私達を指導してください。そんな中で、研究とは決して孤独な作業ではなく、周りの方々の協力によって人間的にも成長できるものであると実感しています。

三上 由比さん

(博士課程後期3年の課程)



2007年から当アメリカ研究講座で勉強し、博士後期課程に在籍中です。現在、教職科目をとりつつ研究職を目指して植民地期のアメリカ文学の研究をしています。この講座は主に文学・歴史の分野で様々なことを研究する院生から成り、分野を越えて切磋琢磨しています。研究生活は大変な日々ではありますが、先生方のご指導を始め、フルブライト講師による英語の授業や他大学の先生による集中講義など貴重な機会にも恵まれています。



講座紹介

本講座は、変貌する世界の中にあって、「イスラムを基層とする社会」が直面する今日的課題を多面的に検討することをめざしています。具体的には、イスラム圏のうち、とくにアラビア語文化圏、ペルシア語文化圏、トルコ語文化圏、中央アジア地域を中心に、そこでの政治・経済・社会・文化の諸問題を基礎的かつ総合的に考察し、これらが織りなす現実のダイナミクスを、歴史的視点をも踏まえながら明らかにしていきます。



講座授業風景

教員紹介

黒田 卓 教授

イラン近現代史

中東を中心としたイスラム圏の近現代史を視野に収めつつ、とくに近現代イランにおける民衆的な社会運動の系譜論を主題に研究を進めています。またイランをめぐる国際関係の推移や、イランの「近代性」との邂逅に関する問題の解明にも取り組んでいます。

大河原 知樹 准教授

アラブ・中東研究(社会史)

近代から現代への移行期のアラブ圏、特にシリアの社会を研究しています。この時期に、当該社会がどのように変化し、どんな問題が生じたのか、その原因はなんであったのか、といった問題を、家族や世帯、移民、法制度などの観点から探求しています。

澤江 史子 准教授

トルコ地域研究・比較政治学

トルコの現代政治が専門です。特にイスラーム復興に関心があり、女性、公共性、世俗主義との関係といった観点から研究しています。また、宗教的あるいは民族的マイノリティについても、政教関係や民主化という視点から研究を深めていきたいと考えています。

04 イスラム圏研究講座

Department of Islamic Area Studies

STUDENT 在学生の声 VOICE

加納 瑤実さん (博士課程前期2年の課程)

私は近代から現代までの外交に関心があり、本講座に入学しました。集まる学生の対象地域や専門分野も多種多様で、それぞれの地域に関わる先生がいっぱいいることから、「イスラム圏」として幅広く学ぶことができることに魅力を感じます。また、授業ではなるべく学生の関心や興味に関連した題材を扱っていただけのこと、週に一度の全員参加の演習では学生・教員から発表に対して意見やアドバイスをもらうことができることから、自分の視野を広め、研究を進めていく手助けとなる機会が多いのも良い点だと思います。

シャイーグ・ジャファログさん (博士課程前期2年の課程)



コーカサスのアゼルバイジャン共和国からの留学生です。20世紀初頭にアゼルバイジャン独立運動を指導したレスールザーデという人物の思想について研究を行っています。本講座では、イスラム圏に属する国々の歴史、社会、政治、経済等幅広い分野に至る研究が行えますが、実際に、さまざまな国やテーマを研究対象にした学生がおります。自分も、イスラム圏というレンズを通して「世界の再発見」をするつもりで研究に取り組んでいます。

05

Department of Comparative Cultural Studies

比較文化論講座



講座紹介

私たちの日常の身の回りには、外国から借用したり、変容を加えて受容するなど、様々な文化の様態があります。このような世界の様々な文化現象を、主として日本との関連を通して多角的に考察するのが、比較文化という分野です。研究対象としては、過去から現代に至るまでの歴史、思想、文学、芸術などのジャンルを扱います。比較文化の手法を用いた研究の目的は、多様な地域文化の実相に迫ることによって日本文化をも照射するところにあります。



講座授業風景

教員紹介

藤田 緑 教授

比較文学・比較文化・アフリカ研究

近世から現代に至る日本および英国において、アフリカ人をはじめとする「異人」のイメージは、いかに形成され、またいかに変遷を遂げてきたのでしょうか。その点を当時の文芸書や旅行記や地理書等の文献に基づいて跡付けながら、歴史的意義を考察しています。

藤田 恭子 教授

ドイツ語圏研究・比較文化論

ノーベル文学賞受賞のヘルタ・ミュラーを生み出した東欧、特にルーマニアのドイツ語話者マイノリティの歴史と文学を研究しています。また、ジェンダー論と文学、観光文化論等の複合的視点から、ドイツ語圏女性旅行記作家とその受容の研究にも取り組んでいます。

澤入 要仁 准教授

比較文化・アメリカ文化

19世紀アメリカの大衆文学や大衆音楽、大衆美術などに興味を持っています。現代の大衆文化の多くは、19世紀にその原型が完成されたからにほかなりません。若々しい気概にあふれた学生たちと、若々しい議論を交わしながら研究を進めています。

坂巻 康司 准教授

比較文学・文化、フランス文学

私の専門は19世紀フランス文学と演劇ですが、最近は特に、明治から現在までの日仏文化交流史に関心があります。日仏間の文化交流は一方的ではなく、常に相互的なものでした。150年に亘るその歴史がどのように動いてきたのか、様々な資料を基に研究しています。

STUDENT

在学生の声

VOICE

半田 幸子さん (博士課程後期3年の課程)



比較文化論講座に所属して早3年目になりました。この講座の特徴は、あらゆる点において多様であるということです。学生の年齢層も国籍もそうですし、研究分野も多岐に亘っています。文学、思想、芸術、交流史など一つのジャンルに留まらず、扱う時代も地域も様々です。これほど多様であると、その分、議論するのが難しくはなりますが、刺激になりますし、何より視野が広がります。幅広い視野を持って研究を進められることが、この講座の最大の長所だと思います。

Markus Malirantaさん (博士課程前期2年の課程)



大学院に入って約一年になります。学部時には、進学しようかどうか悩んでいましたが、まだ学びたいことがたくさんあり、自分の研究に合致している比較文化論講座を選びました。日本人だけではなく、東アジアからの留学生など様々な国の学生がいて議論はとても楽しいです。外国の文化と日本の文化との比較では、自分が当たり前だと思っていたことがそうでもないと感じることができましたし、文化の差異や自分の文化さえもより深く理解することが出来る講座です。

DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

国際文化交流論専攻

この専攻においては、国際化の進展に伴う諸現象について、人間の思考様式、行動様式、文化活動など、言語によって規定されるソフト面と、国際的経済交流、技術協力、資源開発などのハード面とを有機的に関連づけてとらえることにより解明し、そのような視点から、国際文化交流の発展方向や、各種文化摩擦の解消の方向を明らかにすることを目的としています。そのため、この専攻に属する講座は、言語、経済、技術、環境、資源など他方面の分野にわたっています。いずれの講座でも、国際協力についての深い識見を備えた人材の育成に当たります。

専攻分野（講座）

● 言語コミュニケーション論	p.12
● 国際経済交流論	p.13
● 科学技術交流論	p.14
● 国際環境システム論	p.15
● 言語文化交流論	p.16
● 異文化間教育論	p.17
● 国際資源政策論	p.18

01

Department of Linguistic Communication

言語コミュニケーション論講座



講座紹介

本講座では、言語を通じた人間同士の相互理解や交流の方法について、語用論、言語類型論、認知言語学、心理言語学、翻訳理論などのアプローチによって研究することを目標にしています。言語や文化の異なる人々がどのようにコミュニケーションを図るのかという問題を多角的な視点から考察します。言語構造や伝達方法の相違、文化的背景や社会制度の相違、あるいは時代や世代の相違などが言語によるコミュニケーションにどのように影響するのかという問題に焦点を当てます。



講座風景

教員紹介

小野 尚之 教授

英語学・語彙意味論

語彙意味論は、単語の意味の成り立ちや、単語と単語の意味の関係を研究する領域です。私はそこからさらに展開して、ヒトの意味伝達の普遍的なしくみを、異なる言語間の比較の観点から明らかにしたいと考えています。一緒に意味の問題にチャレンジしましょう。

中本 武志 准教授

ロマンス語学・統語論・語用論

私はフランス語を中心に、音韻や語彙、文法、意味を分析し、その結果をイタリア語や英語といった他の言語と比較する研究を行ってきました。また最近では日本語や中国語を始めとするアジアの諸言語におけるポライネスなどの言語行動にも関心があります。

ナロック, ハイコ 准教授

意味論・歴史言語学・類型論・日本語

最近、現実未定の事態を表す「モダリティ」の研究や、多数の言語の間で観察できる意味間の拡張関係を「意味図」で表すような研究をしています。いわゆる「文法化」、つまり、文法形式の成り立ちについても前から興味を持っています。

STUDENT
在学生の声
VOICE

呉 蘭さん

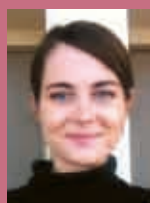
(博士課程後期3年の課程)



本講座には中国、台湾、韓国、アメリカ、マレーシアなど様々な国の留学生が多く、国際色が豊かです。また学生同士の仲もよく、外国にいる寂しさを全く感じません。先生方の適切なご指導と先輩方から有益なアドバイスをいただいたおかげで、研究が順調に進み、博士論文も無事に提出できそうです。入学してからあつという間の4年間でしたが、自分の研究だけではなく、様々な専門分野の知識も得ることができ、貴重な人生経験ができました。

Courtney Fitzgeraldさん

(博士課程前期2年の課程)



本講座の特色の一つは、学生や研究が多様なことです。講座には日本人学生に加え、色々な国からの留学生がいるため、それぞれの多様な経験、文化、興味などを反映して、文法や意味論の深い研究、言語の比較対照研究、さらに言語が社会に及ぼす影響まで様々な研究が行われています。授業も言語学の広い領域に渡って異なった専門の観点から行われます。ここで語用論や類型論、言語の脳神経科学などを学んだことは、私にとって大きな収穫になったと思います。



講座紹介

日本経済の国際化にともない、欧米、旧社会主義国、アジア等の地域との経済交流、相互依存がますます複雑化しています。これらの関係を解説し、正確な判断を行うため、多元的視野に立って、貿易、経済交流、対外直接投資、企業の現地化等の総合的な国際経済分析を行います。これらをベースに、産業内分業、企業経営のグローバル化、途上国の経済発展、先進国の経済再活性化などの変化が進展している国際経済の現状と課題を明らかにします。



授業の合間に

02

国際経済交流論

Department of International Economic Relations

教員紹介

横川 和男 教授

国際マクロ経済学・国際貿易の実証研究

1. マクロ経済的、およびそれ以外の為替レートに影響を与える要因と、為替レート管理、国際通貨制度のあるべき姿についての研究。2. 貿易の決定要因と、貿易への地域的貿易協定の影響についての実証研究。

大東 一郎 准教授

国際経済学と経済発展論

国際貿易の理論や政策、発展途上国を意識した経済発展論を研究しています。国際経済学、ミクロ経済学、マクロ経済学の理論モデルを問題に応じて広く用いながら、自由貿易地域、経済発展と環境保護の両立、経済開発のメカニズムなどを考察しています。

柳瀬 明彦 准教授

国際貿易論・公共経済学

国際貿易論、公共経済学、環境経済学の分野における理論的な研究をこれまで行ってきました。最近では、貿易自由化と地球環境、消費外部性と経済成長、不完全競争下の貿易と自由貿易協定、公共資本と国際貿易などのテーマに関心を持っています。

胡 雲芳 准教授

マクロ経済学・国際経済学

私は経済成長、財や資本の国際貿易に関する諸問題に興味があり、マクロ経済政策特に財政政策の長期及び短期効果の分析、国際貿易・教育などの役割について研究しています。

DULMAA DAGVADASHさん (博士課程後期3年の課程)

STUDENT
在学生の声
VOICE



この講座にくる皆さんは大学を卒業し、大学で勉強して来たことをもっと本格的に研究したい院生たちです。大学で経済学を勉強しても、その経済モデルや理論をどうやって利用し実際の経済問題を理解できますか？また経済問題を解決できる方法を提案するための知識を持っていますか？私がこの講座で研究するのはこれらの問いに明確に解答したいからです。私は日本経済だけでなく国際貿易、経済発展について理論的に勉強する一方で、現在の実際の経済問題を取り扱う実証分析を試みています。社会的にも経済的にもグローバル化が世界に広がっている現状では、一つの国だけで経済問題を解決することは不可能になり、地域的な視点が必要と考えられます。具体的には、自由貿易協定(FTA)が先進国や発展途上国にどんな影響を与えるかに興味を持って研究しています。経済理論から始め貿易政策、経済発展の問題を同時に考えて研究することがこの講座の特徴だと思います。自分の研究から意見や結論を出すこと、忍耐強く研究することなど私にとって必要な能力も学んでいます。

03

Department of Science and Technology

科学技術交流論講座



講座紹介

人類が最初に道具を手にした時から科学技術文明がはじまります。この科学・技術をもって人類は地球上の資産を加速度的に消費し、社会を発展させ環境を変化させてきました。この科学・技術のもつ諸側面を、時間を超え、国境を超え、そして既成の学問体系の枠を超えて学際的に研究するのが本講座です。たとえば鉄を切り口にすると、考古学では鉄製遺物や生産遺跡の分析から技術復元を行い実験による検証から初期の鉄技術を解明します。現代社会においては、産業経済から金属等資源の有効利用、鉄鋼業などの産業システムの再構築に迫ります。このように過去、現在、未来の科学・技術の歴史、役割、交流のあり方や社会の変化を考古学、経済学的手法をもって境界領域を研究できるのが本講座の特徴です。



北海道での発掘調査

教員紹介

深澤 百合子 教授

考古学、アイヌエスノヒストリー

私の専門は考古学で、無文字社会の人々の生活復元について技術、特に鉄を切り口にして研究しています。東北・北海道の北日本で8世紀から18世紀にわたる時間の流れの中に生きた人々の生の姿をあぶりだします。それは、遺跡の発掘調査をおこない、出土する遺物を科学的に分析し解釈することで見えてきます。

葉 剛 教授

産業経済学、開発経済学

私の研究は発展途上国、とくに中国、台湾等を中心に、それらの経済発展の実態に関する実証分析です。そこで、発展途上国における固有の開発の初期条件（国内条件、国際条件）を勘案し、統計データに基づいて産業活動、企業活動、金融制度等を実証分析します。また、統計データでこれらの活動を充分解明することができない場合、フィールドワークを遂行し、ケーススタディ研究も行っています。

冷 奥琳さん (博士課程前期2年の課程修了生)



科学技術交流論講座では、留学生が多くて、日本と外国の文化差異を始め、いろいろ新鮮な体験ができて、非常に楽しい日々を過ごします。また、異なる分野の人と一緒に同じ問題をめぐってディスカッションし、意見を交換することで豊かな視野を培う機会が得られます。私が、ここでは経済、金融、社会の諸問題に深く注視し、理論と現実を結びつく専門的な能力を身につけることができました。さらに日本のアイヌ文化に触れたことがあり、発掘調査も体験できました。研究室で、学習・研究だけでなく、多くの面で先生、先輩の方々から、様々な指導をいただき、常に感謝の気持ちを持っています。

STUDENT

在学生の声

VOICE



講座紹介

環境問題の根本には、文化や社会のあり方そのものに関わる問題が横たわっています。私たちを取り巻く環境の未来は、環境技術に加え、私たちがどのように文化や社会のシステムを再構築していくにかかっているのです。環境問題解決のための政策的取り組みも、一地域社会の問題に局限せず、地球環境や人類の文明全体の問題として捉え直す必要があります。環境・文化・社会の有機的連関の事実を踏まえ、異分野横断的な「知」の結集が求められる段階に至っています。

本講座は、環境思想文化・資源循環・地域共生などをキーワードに、国際環境システムや環境配慮型社会システムのあり方を総合的な視点から探究するとともに、環境保全に関わる地域社会および国際社会のニーズに応える具体的政策を提起しようとするものです。



講座風景

教員紹介

山下 博司 教授

環境思想・異文化共生・生命観・風土論

アジアを中心に、文化比較の視点も採り入れつつ、「世界」「いのち」「こころ」「からだ」をめぐることを探求してきました。「環境」という概念を広く捉え直し、学生の関心、方法、意向、対象地域を尊重しつつ、個性や得意分野を伸ばす指導を心がけます。

青木 俊明 准教授

環境心理学・都市環境政策・都市計画

どれほど科学技術が発展しようとも、我々の行動が変わらなければ持続可能な社会は創れません。そのため、都市計画学と社会心理学をベースにし、環境負荷の小さな協調社会を実現する公共政策（向社会的行動の喚起策）を研究しています。

劉 庭秀 准教授

資源循環型社会・環境システム論

本研究室は、東アジア地域における廃棄物の適正処理、リサイクル、エネルギーの有効利用、資源循環型まちづくり、地域間環境格差の解決などを中心に研究・教育を行っています。具体的なテーマは、容器包装リサイクル、自動車リサイクル、家電リサイクル、廃プラスチックの有効利用、再生可能エネルギーの回収、廃棄物の適正処理などの環境政策評価、国際的な資源循環ネットワークの構築、国際環境協力のあり方などがあげられます。

04

 国際環境システム論講座
 Department of Interregional Environmental System

 STUDENT
 在学生の声
 VOICE

 キム ミ スン
 金 美順さん

(博士課程前期2年の課程修了生)



社会人ながら40代にして学生生活を送るのは、私の人生で掛け替えのない挑戦だったと思っている。3.11東日本大震災の経験から学んだのは、まわりの人との絆、そして環境とエネルギーの両立の難しさである。環境を守りながら、人間が豊かに生活するために必要なエネルギーを作り出す方法はないのか。国際環境システム論講座では、環境とエネルギーの関係について、日本、中国、韓国など各国の学生たちが集まって、より正しい道を探っている。

齋藤 優子さん

(博士課程後期3年の課程)



国際環境システム論講座の院生室では、日本語、英語、中国語、韓国語、様々な言語が飛び交い、まさに国際文化研究科らしい雰囲気の中、院生・研究生が研究を進めています。国は違っても、国際的課題となっている「国際環境システム」をいかに形作っていけば良いのか、各自の研究テーマに沿いながら議論を交わしています。特論では他学部・他研究科からの聴講生も参加するなど、毎回とても活発なゼミとなっています。

05

Department of Intercultural and Interlingual Relations

言語文化交流論講座



講座紹介

本講座は、多様な言語文化圏相互の交流の現象を、相関性・対照性・歴史性などの角度から研究します。

日本、アジア、西洋の言語文化という広範な視点から、各地の言語文化の接触・影響・受容・教育などに関して、さまざまな地域の言語文化交流を総合的に研究します。

具体的には、1) 談話分析・社会言語学・対照言語学・認知言語学・言語類型論・史的比較意味論・語用論、2) 日本語教育・外国語教育、3) 西洋精神史・言語思想史、4) 日本思想史・日本文学、5) 言語文化論などの分野の研究を行っています。



お花見風景

教員紹介

佐藤 勢紀子 教授

■ 日本思想史学・日本語教育学

本来の専門は日本思想史学です。『源氏物語』に見られる「宿世」、「方便」などの仏教思想の考察を中心に研究を行っています。一方で、留学生の日本語教育を担当している立場から、レポート・論文作成の指導法を中心とした日本語教育の研究も行っています。

上原 聡 教授

■ 認知言語学・対照言語学・談話分析

アジアの言語を中心とした個別言語及び言語対照研究をします。文法や用法（における言語間の共通点や相違点）に関する考察を、言語使用・コミュニケーションの実際における認知視点・談話機能・歴史的变化・文化社会的側面など多角的な観点から行います。

長友 雅美 教授

■ 言語文化位相論

私の研究領域は、①日独対照文法の視点を踏まえた言語使用の分析、②「ドイツ学生ことば」に関する意味変遷史、③「北米大陸におけるドイツ言語文化の変容」に関する研究です。これらの研究の基礎をなすのは、残念ながら現在はあまり考慮されない「言語意味内容研究」の立場です。

江藤 裕之 准教授

■ 言語学史・英語史・自由学芸論

西洋精神史における言語学・言語思想の歴史を研究しています。その根底には、言語とは何か、人文学とは何か、リベラルアーツとは何か、教養とは何かという問いかけがあり、先人の思考を追体験することで、私たちの学を省みる場にしたいと思います。

関 秀一さん (博士課程後期3年の課程)



言語文化交流論講座は明るく賑やかな講座です。約三年間在籍してそう感じています。

講座の学生数が徐々に増えてきましたが、院生室内には十分な数の研究用のパソコンやデスク、書籍類などが並び、研究に必要な環境が整っています。

毎週一回行われるゼミでは学生の研究発表に対する質疑応答が活発に行われ、研究がよりよいものになるよう講座全体で取り組んでいます。学生の研究テーマは主に言語、言語教育、文学に関するものです。日本人の学生のほかに現在、中国、台湾、英国、韓国出身の留学生が在籍しており、それぞれの言語・文化の視点から多様な意見が飛び出します。この点は本講座の大きな特徴の一つといえるでしょう。

季節に応じてお花見兼新入生歓迎会、芋煮会、送別会などが学生主導で催され、和やかな雰囲気作りに役立っています。

STUDENT

在学生の声

VOICE



講座紹介

本講座は、日本語と他の言語の対照分析を行い、以下の三つの分野を中心に研究します。

1. 認知言語学、対照言語学、言語類型論、コンピュータ言語学、形式意味論等の最新の研究成果を取り入れ、人間の認知、言語の機能、コミュニケーション等の観点からの日本語を中心とした言語の研究を行います。

2. 日本語と他の言語の対照言語学的研究に基づいた、日本語を学習する外国人のための、言語学習過程のモデル化や言語教育システムの構築を試みます。

3. 21世紀COEプログラム(人文科学)「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」(平成14年度採択、平成19年3月終了)の中核講座として、言語理論(認知言語学、形式文法)と脳機能学の融合を目指します。



講座授業風景

教員紹介

吉本 啓 教授

言語認知科学

情報科学・脳科学を含む言語認知科学の観点からの言語研究、およびその成果の外国語教育への応用。外国語(第2言語)習得、日本語文法、形式文法(カテゴリー文法や形式意味論)や脳科学の文処理研究への応用が中心的研究テーマです。

北原 良夫 准教授

英語学・言語学・高等教育論

もともと英語学の出身でその方面の研究も細々としていますが、本務が高等教育開発推進センターですので、近年は高等教育に関する研究に注力しています。統計的手法を用いた取り組みをすることが多く、調査等の立案やデータ解析等では力になれると思います。

中村 渉 准教授

認知=機能主義言語学・言語習得

私は、日本語、英語を含む様々な言語の文法現象の認知的動機づけ及び類型論的な広がりを中心に意味論、談話語用論の視点から研究していますが、同じ視点から、日本語、英語の文法の習得過程も研究しています。興味を持たれたら、気軽にお問い合わせ下さい。

菅谷 奈津恵 准教授

第二言語習得、日本語教育

第二言語における文法の習得過程を研究しています。これまで、日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得研究を中心に行ってきました。日本語以外にも、ロシア語や韓国語、中国語など様々な言語の習得にも関心があります。

06 異文化間教育論講座

Department of Cross-Cultural Education

STUDENT 在学生の声 VOICE

柳 朱燕さん (博士課程後期3年の課程修了生)



異文化間教育論講座は、様々な言語を材料にして独創的な調理法で料理ができる温かいキッチンである。もちろん「独創的な調理法」と言えば、認知言語学、対照言語学、言語類型論、コンピュータ言語学、言語習得論等、理論的観点に基づいた研究方法であるが、そこに「独創性」という味付けができるように励ましてくれるのは本講座の先生方である。多様な観点からの考察を可能にする教育環境のなかで、新たな研究成果がどんどん作られる異文化間教育論講座というキッチン。そこのおいしいおいが言語学者の嗅覚を刺激している。

07

Department of International Resources Policy

国際資源政策論講座



講座紹介

本講座は、国際的な資源開発と利用・配分のあり方について、自然科学的・工学的・経済政策的・社会科学的な視点から、ユニークな教育・研究を行っています。自然科学的分野では、自然科学の過去・現在・未来と資源問題を、工学的分野では鉱物、エネルギー、材料等の資源利用について、それぞれ環境問題との関わりを重視する視点から教育・研究を行います。なお、当講座は2006年4月から「ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラム」と連携し資源・環境問題における人間安全保障について教育・研究を行っています。



東北大学リベラルアーツサロンにて

教員紹介

重野 芳人 教授

環境技術論・産業社会科学論

私は元々材料プロセスの研究を専門として来ましたが、そこで得た様々な数学的知識を産業技術や環境といった社会的な問題に適用するため、SD MODELやAGENT-BASED MODELの研究を行っています。このような事に強く興味のある学生の入学を期待します。

冬木 勝仁 准教授

食料経済学・アグリビジネス論

私の専門分野は農業市場学で主に米を中心とする農産物流通及びアグリビジネスについて研究してきました。最近ではそれら「動脈流通」に加え、農業廃棄物、食品廃棄物の有効利用といった「静脈流通」の実態とそれを支える政策・制度に関心を持っています。

プシュパラル, ディニル 教授

環境デザイン工学・材料工学

私は以前材料工学を中心に未利用資源の有効利用・新素材開発などの研究を行っていました。現在は新技術・地球環境・ヒューマンセキュリティに関する新領域融合研究を行っています。未利用資源、エコロジカルフットプリント、人間開発指数、人口移動が私のキーワードです。

木谷 忍 准教授

公共選択・環境教育・環境評価学

私の専門分野は環境経済学を用いた環境評価論ですが、現在は、地域環境づくりに参画する市民がどんな意識や態度をとりながら合意が形成されていくかに研究関心があります。経済学的方法よりも環境教育や倫理的な思索と、RPGなどの実験的手法が主な研究手段です。

STUDENT

在学生の声

VOICE

張 文字さん

(博士課程後期3年の課程修了生)



21世紀に入り、地球温暖化をはじめとする地球環境問題の存在はついに人類に認識されました。自然と調和し、持続可能な社会を実現するためには、知識と技術の力を借りなければなりません。国際資源政策論講座はそのプラットフォームを提供します。幅広い学問分野と多彩な教授陣の指導の下で、社会科学と自然科学融合の知識と手法を用い、自分が関心のある環境問題に取り組みます。環境保全をますます重視する時代に未来を切り開くと思う方には、魅力的な講座だと考えています。

ガンボルド アルタンツェツェグさん

(博士課程前期2年の課程修了生)



国際資源政策論講座は、新世紀が直面する問題の一つである資源問題の研究に取り組んでいます。人間が自然環境に及ぼしている影響、また自然が人間にどのように影響を与えているのかをはじめ、さらに様々な資源をいかに有効的に利用していくべきかなど、自然環境や資源に関わる様々な課題を社会科学的視点から考察します。留学生が多く、多文化との共生も味わえる環境となっています。

国際文化言語論専攻

この専攻においては、高度な外国語能力を身につけ、独創的・総合的判断力を備え、エスニシティ文化や多元的文化社会に対応できる21世紀型の国際的人材の養成を目的としています。そのため、この専攻には、言語科学、言語応用、多元文化、言語教育など言語について様々な角度から研究する講座が設けられ、国際社会で活躍する専門家や新しい研究分野のパイオニアを育成する教育プログラムを提供しています。

専攻分野(講座)

● 言語科学基礎論	p.20
● 多元文化論	p.21
● 言語応用論	p.22
● 言語教育体系論	p.23

01

Department of Theoretical Linguistics

言語科学基礎論講座



講座紹介

本講座は人間の言語能力の解明を目指します。すなわち、日本語や英語などの個別言語に見い出される様々な言語事実を注意深く観察し、その中に潜む構造的・意味的一般性を探り出すとともに、それらが人間の言語に関する一般理論とどのように関連するのかを考察します。また、現代社会におけるダイナミックな言語使用の諸相にも取り組み、これらの探求を通じて人間の言語能力の謎に迫ります。



講座授業風景

教員紹介

川平 芳夫 教授

英語学・意味解釈論

英語の意味と構造の対応関係を深く理解し、結果として英文の意味をより正確に解釈できるようになることを目指して、英語学・意味解釈論の探求を行っています。また、英文解釈の理論的基盤とすべく、言語一般の意味と構造を対応させる理論をも探求しています。

山田 誠 教授

英語統語論・生成文法

生成文法の立場から、主に英語の文の構造を解明することを目指しています。英語において、普通とは異なる語順の文がどのように派生されるのか、また「動名詞」と呼ばれる特殊な構文がどのような構造をもっているのか、などの問題に取り組んでいます。

高橋 大厚 准教授

言語学・統語論

生成言語学という視点から統語論を研究しています。日本語や英語などの個別言語の観察を通して言語理論の研究をしています。最近では、日本語と中国語、トルコ語、ドラビダ語族言語、バスク語などの比較統語論研究を行っています。

浅川 照夫 教授

英語学・英語教育

文法研究の基本は、資料として十分に適格なデータを広く集めることにあります。しっかりしたデータ収集・分析能力があれば、どのような言語理論にも対応できます。堅実なデータに鋭い分析を加え、文法の規則性に迫りたいものです。

坂本 祐太さん (博士課程前期2年の課程修了生)



2010年4月から在籍し、現在は研究職を目指しながら日々勉強に明け暮れています。言語科学基礎論講座には、生成文法理論を研究するための充実した指導体制と研究環境が整っています。在籍している先生方は皆生成文法理論の専門家であり、様々な視点から自分の研究に関してアドバイスをいただけます。院生も全員が同じ理論の枠組みで研究をしていることから、院生独自の読書会(Noam Chomskyの論文等を輪読形式で読んでいます)でも活発な議論が行われています。また、独立研究科であることから留学生が多数在籍しており、言語のデータを集める環境も非常に優れていると感じています。加えて、英語で書かれた論文を精読したり文法の仕組みを考える中で、英語の力も自然と向上させることができます。このように、言語科学基礎論講座には生成文法理論を研究するに当たって、他の大学院や研究室には無い魅力的な側面が多くあります。言葉に興味のある皆さん、私たちと一緒に言葉の不思議を解明する旅に出かけてみませんか？

STUDENT

在学生の声

VOICE



講座紹介

本講座は、人類学など新しい専門分野の教員を迎えて多元言語文化社会論講座を発展的に解消し、文化の多元性に関わる研究領域を包括的に新しい講座名のもとに2009年改めて発足した新しい講座です。社会学・文化人類学・比較文化論・環境文学などの専門家が、文化の多元性に着目して学際的な研究・教育を推進する場合は、いわゆる文科系の分野の中でのニーズが大きくなっています。カルチュラル・スタディーズとして十把一絡げに、安易な領域横断を批判されがちなこの分野ですが、扱う「テキスト」は同様であっても、文化の多元性に対する厳密な理解を基礎におき、地に足が着いた研究・教育を進めるのが私たちの講座の特徴です。



講座授業風景

教員紹介

石幡 直樹 教授

環境文学批評

文学作品に見られる(あるいは潜在している)環境にまつわる意識を読みとり、自然環境と人間の文学活動との関わりを解明しようとする環境文学批評を研究しています。文学と環境との関連を探ることは、両者の解釈に新たな可能性を与えると考えています。

ホールデン, タッド 教授

メディア、社会論、アジア・日本文化論

専門分野は学際的社会学です。研究はメディア・コミュニケーションの分野を中心に、日本の若者文化、ジェンダー広告、日本のスポーツにおけるグローバル化等を比較文化、アメリカ研究、日本研究、記号学を介して考察／検証し、理論の構築を目指しています。

鈴木 道男 教授

比較文化論(江戸博物学)

西洋以外では唯一長足の、しかも独自の進歩を遂げた江戸時代の博物学を、当時の諸学問、文化の中でいかに定位すべきかをさぐる研究です。その実態に応じて、科学史に限定されない史学、文学、生物学など、複眼的視点から実情に迫ろうとしています。

吉田 栄人 准教授

ラテンアメリカ地域研究

ラテンアメリカの中でも、メキシコ、特にマヤ地域の先住民社会を主たる研究対象としています。これまでは現代の祭礼や宗教儀礼、伝統医療などを主たる研究テーマとしてきましたが、現在は先住民言語教育をめぐる問題に取り組んでいます。

佐藤 雪野 准教授

チェコスロヴァキア史、地域研究

チェコスロヴァキア建国前、解体後を含めて、同国関連の歴史と現状を研究しています。具体的には、戦間期チェコスロヴァキアの多文化社会や経済上の民族間協力、現代ヨーロッパのマイノリティ(ロマなど)の状況をテーマに民族共生のあり方を考えています。

02 多元文化論講座

Department of Multi-Cultural Societies

STUDENT 在学生の声 VOICE

春花さん (博士課程後期3年の課程)



こんにちは。春花と申します。

多元文化論講座は、2009年に多元言語文化社会論講座が新しい講座名をもって改めて発足したばかりの新しい講座です。現在はモンゴルからの留学生2人、中国からの3人、そして2人の日本人が在籍している、国際色豊かな講座です。

研究室には、研究に必要な装置や文献がそろっており、快適に研究することができます。また、学生は全員、講座の名前の通り、幅広く多角的に文化の姿を捉えようとしており、とても多様な研究に接することができます。隣の人が自分とは全然違う方法で研究しているのを見て、いつも刺激を受けています。

研究室ではいつも、学生の間で自分のテーマや、研究について熱心に議論しています。先生からは手厚い指導を受けており、安心して充実した院生生活を送ることができます。

最後に一言。多元文化論講座は勉強ばかりではなく、人生についての研鑽を積む機会にあふれています。ぜひ一度見学に来て見て下さい。

03

Department of Cultural Uses of Language

言語応用論講座



講座紹介

本講座は、言語と文化、言語の応用形態としての文化現象を総合的に研究する講座です。従来の狭い分野に閉じ籠もる個別的研究ではなく、巨視的視点から欧米言語・文化・文学の学際的な応用研究を目指しています。研究テーマは、このような視座に関連する広い範囲に及びます。また、文献を正確に読み解く能力を育成すると共に、外国語の実用的運用能力を高めることにも力を入れております。



院生室授業風景

教員紹介

鈴木 美津子 教授

※2013年3月退職予定

十九世紀イギリス小説

オースティン、ブロンテ姉妹、ギャスケルなど十九世紀イギリスを代表する作家の作品を、当時の政治や社会との関連に焦点を当てて、読んできました。最近、イングランドとアイルランドの併合をテーマにしたロマン主義時代の小説に関心を抱いています。

佐藤 研一 教授

十八世紀ドイツ文学

近代的理性の行詰りが指摘される今日、逆に、その原点である近代胎動期にもどって考えてみるのも無意味ではないでしょう。最近、非ヨーロッパとの遭遇により惹き起こされるヨーロッパの質的変貌について、十八世紀ドイツ文学を素材に考察を加えています。

市川 真理子 教授

イギリス演劇

シェイクスピアをはじめとするイギリス近代初期劇のオリジナル・ステイジングの研究をしています。例えば『ハムレット』が1600年ころグローブ座で上演されたとき、その舞台ではどのようなことが起ったのかということに関連する諸問題を考察しています。

杉浦 謙介 教授

ドイツ語教育・CALL・e-Learning

私は、CALL (Computer Assisted Language Learning) あるいはe-Learningによってドイツ語の授業をしています。また、そのシステムや教材を開発研究しています。

STUDENT

在学生の声

VOICE

山口 梓さん (博士課程後期3年の課程)



文学を通して「社会と個人のありよう」を勉強したいと思い、この講座を選びました。私たちの講座では言語、文化、文学といったさまざまな学術領域を扱っています。また発表などに必要な技術的な側面の習得にも力を入れています。先生や院生の方々との交流を通して、それぞれの多岐にわたる研究領域に触れる機会も多く、私自身大きな刺激を受けています。またこの講座は個々人の考えを大切にしてくれますので、一人一人の視点を広げるのに最適な環境です。

藤倉 ひとみさん (博士課程後期3年の課程)



私達の言語応用論講座は、それぞれが自由に研究できるような環境になっています。文学を主体に、様々な分野の研究を各自で行っているの、学生同士が意見を交換し合い、新たな観点から自分の研究を見直せる講座であると感じています。自分の研究に対し、より専門的な目線と広い視野で見つめるという両方の視点の大切さを、先生方から日々ご指導頂いております。恵まれた環境の中で研究に専念でき、おかげで素晴らしい学生生活を送っています。



講座紹介

地球規模で進行する国際化の流れの中で言語の果たす役割がますます増大するとともに、時代に即応した言語教育態勢の確立が世界的な急務となっています。本講座では、真に時代の要請に応えうる言語教育者・研究者の育成をめざして、グローバル・スタンダードの地位を獲得しつつある英語はもちろん、日本語、スペイン語など様々な言語の持つ独自性と共通性に光を当て、言語習得、教育政策、教育プログラム、指導法、言語教育評価、コーパス研究などの領域から体系的・総合的に研究しています。



講座授業風景

教員紹介

志柿 光浩 教授

言語教育学、ラティーノ研究

構成主義学習観、認知負荷理論、学習の科学などの知見に基づくスペイン語教育の実践。大学における言語学習。

岡田 毅 教授

英語コーパス研究

大規模な英語コーパス、および特定分野・目的別の特殊コーパスの構築と解析とが大きな研究テーマです。伝統的な語彙・文法範疇からは見えにくい英語の自然な用法を客観的に解き明かすことで、外国語としての英語教育に大きな示唆を与え得ると考えています。

ワーナー・ピータージョン 准教授

言語心理学、第二言語習得論

専門分野は第二言語習得に関わる理論と方法論を中心とし、習得過程での脳のメカニズムや心理的要因や社会文化的環境等にも光を当てながら、実践的現場で効果的に第二言語を習得するバイリンガル教育のあり方を研究しています。

04 言語教育体系論講座

Department of Language Education

STUDENT 在学生の声 VOICE

川井 一枝さん (博士課程後期3年の課程修了生)

当講座には様々な現場で教えている教員が多く在籍してきました。教師未経験の若い学生と現役教員が混在する研究室での意見交換はお互いに良い刺激となり実践能力を高めることに役立ちます。また、教師未経験の学生には「言語教育実習」が義務付けられているのも講座の大きな特徴です。企画から自分で行う実習経験は、教師経験がない学生にとって大変有意義なものであり、研究対象である言語教育を実践的観点から考察し研究を深める良い機会となっています。

仇 暁芸さん (博士課程後期3年の課程修了生)

私たちの講座の特徴は「少数精鋭」です。日本人をはじめ、中国人、ルーマニア人、アメリカ人など実にインターナショナルで、まるで国際社会にいるような感覚でした。多様な背景を持つ仲間たちが様々な「言語」について、そして「いかに教えるか」について切磋琢磨してきました。とても刺激的で、視野が広がりました。

人がことばを話したり理解したりしようとするとき、脳の中で何が起きているのかは、長い間謎でした。それがここ15年ほどで、fMRI（機能的核磁気共鳴画像法）などの革新的な技術を応用して、脳のはたらきを画像として見るができるようになりました。それによって、「言語」が関連する分野でも、言語学、心理学、医学、情報処理学など文系・理系の枠を越えた学際的な研究への道が開かれました。本センターは、東北大学大学院国際文化研究科の言語科学研究者を中心として、情報科学研究科、医学系研究科、文学研究科の言語学、心理学、医学の研究者が連携し、「脳の中のことば」に迫ります。このような文理融合的な言語科学の研究は国際的にも類を見ない独創的なものです。将来的には工学者や遺伝学者をも含めて、言語と脳の先端的な総合科学の創出を目指しています。

本センターの基盤となったのは、東北大学21世紀COEプログラム（人文科学）「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」です。このプログラムは、平成14年度の開始以来5年間の研究教育活動を経て、平成18年度末にその活動を終了しました。その成果を継承・発展させるため、平成19年4月、国際文化研究科の附属研究センターとして「言語脳認知総合科学研究センター」がスタートし、それ以来研究教育活動を継続しております。

本センターの研究教育活動の一環として、毎月センター研究員による研究成果の発表の場である「コロキウム」を開催しています。また、外部から招いた講師による講演会を随時開催しています。さらに、関連分野において先端的な研究を行っている国内外の研究者を招いてワークショップを開催します。これらの研究教育活動を通して、本センターの研究成果を広く一般に公開していきます。

氏 名	学位・専門分野	職名・所属（東北大学）
吉本 啓 センター長	Ph.D. (ドイツ・シュトゥットガルト大学) 理論言語学、知能情報学	教授 高等教育開発推進センター
岩崎 祥一	医学博士 (福島県立医科大学) 認知心理学、実験心理学	教授 大学院情報科学研究科
山下 博司	Ph.D. (インド・マドラス大学) 印度哲学、思想史	教授 大学院国際文化研究科
上原 聡	Ph.D. (米国・ミシガン大学) 言語類型論、認知言語学	教授 高等教育開発推進センター
小野 尚之	文学博士 (神戸大学) 語彙意味論、形態論	教授 大学院国際文化研究科
小泉 政利	Ph.D. (米国・マサチューセッツ工科大学) 理論言語学、言語認知脳科学	准教授 大学院文学研究科
呂本 俊亮	行動科学博士 (北海道大学) 教育心理学、認知心理学	准教授 大学院情報科学研究科
高橋 大厚	Ph.D. (米国・コネチカット大学) 理論言語学、統辞理論	准教授 大学院国際文化研究科
ナロック, ハイコ	Ph.D. (ドイツ・ボーフム大学) 学術博士 (東京大学) 認知言語学、意味・形態論	准教授 大学院国際文化研究科
江藤 裕之	Ph.D. (米国・ジョージタウン大学) 文学博士 (上智大学) 意味論、言語学史	准教授 大学院国際文化研究科
ワーナー・ピーター・ジョン	情報学博士 (名古屋大学)	准教授 大学院国際文化研究科
中本 武志	文学修士 (東京外国語大学) M.A. (ベルギー・モンス・エノー大学) 理論言語学、語用論	准教授 大学院国際文化研究科
横山 悟	国際文化博士 (東北大学) 認知神経科学、神経・心理言語学	助教 加齢医学研究所
宮本 正夫	Ph.D. (カナダ・ヴィクトリア大学) 神経・心理言語学、書記体系	非常勤講師 大学院国際文化研究科

言語総合科学コース

言語総合科学コース(International Graduate Program in Language Sciences)は、文部科学省による国際化拠点整備事業(グローバル30)の一環として、2011年度から国際文化研究科に新しく設置する「英語による学位コース」です。グローバル30は、2020年を目処に30万人の留学生受け入れを目指す「留学生30万人計画」を具体化するための事業であり、我が国の高等教育の国際競争力を強化すること、および留学生等に魅力的な水準の教育等を提供することを目的としています。東北大学は、他の12校の大学とともに国際化拠点として選ばれました。

言語総合科学コースの教育目的は、言語学、心理学、情報科学、脳科学などの多面的な視点から言語の学際的な研究と教育を促進することです。このコースでは、言語学および隣接科学の先端的な研究に基づいて、言語理論、言語解析、言語習得と産出、コミュニケーション理論、言語に関わる脳機能などの問題を探究し、英語によって教育指導を行うことにより国際的水準を満たす教育プログラムの確立を目指します。このコースは、国際文化研究科附属言語脳認知総合科学センターとの連携により、同センターの研究成果を教育に還元するという目的も併せ持っています。

募集要項等、さらに詳しい情報は、下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=101106174100>



「ヒューマン・セキュリティと社会」プログラム

「ヒューマン・セキュリティと社会」プログラムは、「ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラム」の1つとして国際文化研究科に設立された教育プログラム(博士前期2年の課程、後期3年の課程)です。このプログラムは授業を含む教育指導のすべてを英語で行います。また入学時期は、4月と10月になります。

国際情勢の変化と「ヒューマンセキュリティ」

冷戦時代の終焉以降、軍事を中心とする従来の「国家安全保障」に代わって、疫病、貧困、環境、紛争などによる「人間の安全」に対する脅威への取り組みを重視するヒューマン・セキュリティ(人間の安全保障)の概念が、新しい国際社会を理解する考え方として注目されるようになり、日本もこの考え方を国際協力の柱にしたいとの意向を表明しています。とりわけ文化の多様性や経済の不平等発展を特徴とするアジアの国々では、貧困、災害、劣悪な環境衛生と栄養障害、社会不安などを背景に、多くの人々が生命と尊厳を脅かされる生活を余儀なくされています。また、HIV/AIDSやSARSのような国際感染症、環境汚染、食の汚染、さらにはテロ行為や麻薬取引などが国境を越えて人々の暮らしと安全を脅かしています。

世界への知的・社会的貢献

21世紀の国際社会が直面するこれらインセキュリティの実態とくに個人や社会にたいする多様な脅威はきわめて複合的な要因によってもたらされており、問題解決に向けた取り組みには研究と実践の両面において、従来の専門知の壁を越えた複合的な視点を持つリーダーと問題解決型の学際的な知を結合した新しい方法論が求められています。

東北大学の4つの大学院、農学研究科、医学系研究科、国際文化研究科、および環境科学研究科は、ヒューマン・セキュリティを実現する国際社会の建設に知的側面から貢献することを目標に、2005年4月(平成17年度)から、「ヒューマン・セキュリティ連携国際教育プログラム」を発足させました。

専門的職業人の育成

この連携国際教育プログラムでは、人間の生存と尊厳に対する脅威について、食糧・農業、健康、環境、地域社会等の諸問題の複合的構造を理解し、国内・国際社会において、政策や地域社会のリーダーとしてヒューマン・セキュリティの実現に貢献できる専門的職業人・研究者の育成を行います。対象者は、日本を含むアジア地域諸国の大学院学生および社会人です。

この連携国際教育プログラムへの入学を希望する者は、工学、理学、医科学、農学、社会科学、人文科学の分野における十分な学力と能力を、また将来ヒューマン・セキュリティの分野でリーダーシップを発揮する可能性を備えていることが要求されます。

募集要項等、さらに詳しい情報は、下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=120116121147>

研究科開講授業科目と担当教員

●前期2年の課程

専攻	専攻分野	授業科目	担当教員
国際地域文化論	アジア文化論	東アジア文学論	勝山 稔
		日本文化形成論	石川 秀巳
		日本文化展開論	佐野 正人
	ヨーロッパ文化論	ヨーロッパ文化形成・発展論	野村 啓介
		ヨーロッパ思想論	佐藤 透
		ヨーロッパ近現代国制論	布田 勉
		ヨーロッパ表象文化論	寺本 成彦
	アメリカ研究	アメリカ史論	小原 豊志
		エスニックグループ研究	竹中 興慈
		アメリカ文化史論	井川 真砂 (非常勤)
	イスラム圏研究	イスラム圏社会・経済論	澤江 史子
		イスラム圏政治論	北川 誠一 (非常勤)
		イスラム圏近現代史論	黒田 卓
		イスラム圏社会・文化論	大河原 知樹
	比較文化論	多元文化構造論	藤田 恭子
		比較表象文化論	藤田 緑
		比較言語芸術論	澤入 要仁
		アジア・ヨーロッパ文化比較論	坂巻 康司
国際文化交流論	言語コミュニケーション論	比較言語構造論	小野 尚之
		比較言語コミュニケーション論	中本 武志
		コミュニケーション体系論	宮本 正夫 (非常勤)
		比較言語意味論	ナロック, ハイコ
		言語コミュニケーション論特別講義	宮本 正夫 (非常勤)
	国際経済交流論	国際貿易投資理論	大東 一郎
		国際金融投資論	胡 云芳
		国際経済政策論	横川 和男
		国際経済関係論	柳瀬 明彦
	科学技術交流論	産業開発協力論	葉 剛
		科学史・科学技術論	深澤 百合子
	国際環境システム論	環境思想文化論	山下 博司
		資源循環型環境システム論	劉 庭秀
		地域環境共生システム論	青木 俊明
		国際環境システム論特別講義	岩鼻 通明 (非常勤)

※それぞれの専攻分野には表記の授業科目に加え、講座教員全員が担当する特論と演習が開講されます。

※後期3年の課程では、それぞれの専攻分野で特別研究・特別演習が開講されます。

専攻	専攻分野	授業科目	担当教員
国際文化交流論	言語文化交流論	日本言語文化論	佐藤 勢紀子
		言語文化対照論	上原 聡
		言語文化習得論	井上 優 (非常勤)
		言語文化位相論	長友 雅美
		通時言語文化解析論	江藤 裕之
		言語文化交流論特別講義	金丸 芙美 (非常勤)
	異文化間教育論	言語教育システム論	中村 渉
		言語データ分析論	吉本 啓
		言語調査解析論	北原 良夫
		第二言語習得論	菅谷 奈津恵
	国際資源政策論	異文化間教育論特別講義	千葉 庄寿 (非常勤)
		地域社会政策論	木谷 忍 (協力教員)
		環境科学技術論	オムニバス
		自然産業調整論	冬木 勝仁 (協力教員)
		持続可能型資源政策論	ブシュバール, ディニル
		資源材料技術論	重野 芳人 (非常勤)
		国際資源政策論特別講義	ブシュバール, ディニル
		国際資源政策論特別講義	オムニバス
国際文化言語論	言語科学基礎論	文法構造論	山田 誠
		生成統語論	高橋 大厚
		意味解釈論	川平 芳夫
	多元文化論	多元言語文化動態論	鈴木 道男
		多元文化共生論	佐藤 雪野
		多元環境文化論	石幡 直樹
	言語応用論	ラテンアメリカ民族文化論	吉田 栄人
		言語文化モード論	鈴木 美津子
		言語芸術空間論	市川 真理子
		言語芸術形象論	杉浦 謙介
	言語教育体系論	言語文化テキスト動態論	佐藤 研一
		言語獲得論	ワーナー・ピータージョン
		言語獲得評価論	志柿 光浩
	共通科目	コーパス研究	岡田 毅
		ジェンダー研究	河野 銀子 (非常勤)
		研究のための英語スキル	江藤 裕之
		研究のための日本語スキル	佐藤 勢紀子
	言語科学概論	言語科学概論	ロング, クリストファー・ジェームス (非常勤)

平成24年度 入学者選抜状況

●前期2年の課程

専攻	定員	一般		社会人		外国人	
		志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
国際地域文化論専攻	15	13	8	1	0	9	4
国際文化交流論専攻	20	6	4	1	1	16	11
国際文化言語論専攻	13	4	0	0	0	1	1

●後期3年の課程

専攻	定員	一般		外国人		進学	
		志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
国際地域文化論専攻	11	1	0	0	0	2	2
国際文化交流論専攻	16	2	0	1	1	2	1
国際文化言語論専攻	11	1	1	0	0	1	1

平成24年度 入学者選抜状況(出身大学別)

●前期2年の課程

出身大学の種別	志願者数	合格者数
東北大学	0	0
本学以外の国立大学	8	5
公立大学	2	2
私立大学	15	6
海外の大学	24	15
その他	1	1
計	50	29

●後期3年の課程

出身大学の種別	志願者数	合格者数
東北大学	7	4
本学以外の国立大学	0	0
公立大学	0	0
私立大学	1	0
海外の大学	2	1
計	10	5

国・地域別留学生数(平成24年1月1日現在)

国・地域名	前 期	後 期	学 研	大 研	特 研	総 計
アゼルバイジャン	1					1
アメリカ	1	1				2
オーストリア		1				1
スウェーデン	1					1
タイ		1				1
トンガ			1			1
ブルガリア				1		1
ベトナム	1					1
マレーシア		1				1
ミャンマー			1			1
モザンビーク		1				1
モンゴル	2		1			3
ルーマニア		1				1
韓国	3	13				16
台湾	4	4				8
中国	41	21	16		2	80
計	54	44	19	1	2	120

派遣留学生数(平成14～23年度)

国・地域名	前期2年の課程	後期3年の課程	計
アメリカ	2	3	5
オーストラリア	0	2	2
カンボジア	0	1	1
カナダ	1	0	1
中国	0	2	2
チェコ	1	0	1
イギリス	1	0	1
フランス	1	0	1
ドイツ	1	0	1
オランダ	0	2	2
イスラエル	0	1	1
イラン	1	0	1
韓国	0	1	1
ロシア	0	1	1
台湾	0	1	1
トルコ	0	1	1
ウズベキスタン	0	1	1
ベトナム	1	0	1
シンガポール	1	0	1
計	10	16	26

修士論文題目(平成23年度)

国際地域文化論専攻

アメリカ研究

- バブリック・エネミーの文化ポリティクス ―「ブラックCNN」としての活動に注目して―
- 書くことにおける自己探求 ―ポール・オースター『孤独の発明』―
- ベティ・フリーダン再考 ―ユダヤ系左翼的ジャーナリストとしての側面を中心に―
- ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』における「語り」 ―ロリータ像を巡って―

比較文化論

- ハーバード・ジョージ・ボンティングの写した日本 ―人物・自然・町並みを中心に―

国際文化交流論専攻

言語コミュニケーション論

- 認知意味論による日本語の間接受身文における関与性の研究
- 文法化から見る日中の通過動詞

国際経済交流論

- 貿易自由化と環境保全の政策について ―ヘクシャー・オリーン・モデルによる分析―
- VARモデルによる中国金融政策の効果についての研究
- 観光と環境汚染 ―小国開放経済の貿易モデルによる分析―

科学技術交流論

- 中国の金利期間構造に関する実証分析 ―金融政策の影響に焦点を当てて―

国際環境システム論

- 結婚移住女性の新生活環境適応支援に関する研究 ―日韓両国の政策比較と山形県鶴岡市の事例をもとに―
- 中国の地方都市における廃車回収処理の現状分析 ―黒龍江省を事例に―
- 自動車中古部品利用促進に関する日中比較研究

言語文化交流論

- 現代日本語の否定文末諸表現モダリティ分類化の試み ―国会会議録検索システムを活用して―
- 話題選択スキームとストラテジーの日中対照研究 ―初対面会話データを用いて―
- 中国人日本語学習者による接続表現の使用に見る母語との関係
- 意見表明における前置き表現 ―中国人学習者と日本語母語話者の比較を通して―

異文化間教育論

- 日本語および中国語の鼻音を末尾に持つ音節の対照研究
- 中国語母語話者による授受補助動詞の習得に関する研究 ―「～てくれる」と「～てもらう」の使い分けを中心に―
- 中国人日本語学習者のVN型二字漢語動詞の習得に関する調査 ―VN型二字漢語動詞の一体性の視点から―
- 日中両言語の動詞による移動表現の対照研究 ―認知類型論の視点から―

国際資源政策論

- 中国における森林ストックのシステムダイナミクスモデルによる解析
- 中国における建築廃棄物のSDによる解析 ―北京市を事例に―
- 中国における米のブランド化について ―日本の経験から戦略を考える―
- モンゴルにおける鉱物資源開発とその問題点
- 中国における資源ナショナリズムの台頭と未来 ―日本への影響を中心に―



国際文化言語論専攻

言語科学基礎論

- ロマンズ語の代名詞的後接語に関する研究
- A Study of Sluicing and Cleft in Mongolian: A Comparison with Japanese (モンゴル語の間接疑問縮約と分裂文に関する研究 ー日本語との比較を通してー)
- 中国語と日本語における項省略の研究
- On Genitive Phrases Related to Nominative-Genitive Conversion in Japanese (日本語における主格-属格交替における属格句の特性について)
- 生成統語論における関係節の派生について ー移動分析と基底分析の比較を中心にー

多元文化論

- ワーズワスの詩に見られる環境意識の源流

博士論文題目(平成23年度)

国際文化交流論専攻

言語コミュニケーション論

- Linguistic Constraints on Code Switching of Japanese-Chinese Bilingual Children (日中バイリンガル幼児のコードスイッチングにおける言語的制約)
- 日韓翻訳に見られる翻訳規範の変化と異文化コミュニケーション ー川端康成『雪国』の翻訳を題材にー
- 指示詞の日中韓対照研究

言語文化交流論

- あいづち使用の中日対照研究 ー談話分析の観点からー

異文化間教育論

- 「投射モデル(the Projection Model)」による格助詞「で」の学習・指導に関する応用言語学的研究
- 第一・第二言語における韓国語未完了アスペクトの習得過程 ー類型論と認知的アプローチの観点からー

国際資源政策論

- 中国におけるセメント産業の環境負荷削減可能性に関する研究 ーCDM事業の評価と二酸化炭素削減の課題を中心にー

国際文化言語論専攻

言語生成論

- A Non-Movement Analysis of Sluicing(間接疑問縮約構文の非移動分析)

言語システム論

- A Semantic Analysis of Chinese Topic Markers(中国語話題化標識の意味分析)

言語教育体系論

- 成人日本語母語話者による英語リズム習得に関する研究 ー学習法と英語習熟度レベルの違いがもたらす効果ー
- The Pragmatics of Japanese Apologies: On the (Non) Apologetic Functions of gomen, gomen nasai, sumimasen (日本語詫び表現の語用論 ー「ごめん」、「ごめんなさい」、「すみません」の謝罪機能と謝罪以外の機能についてー)
- 外国固有名詞の中国語音訳表記 ー語彙教育への応用に向けてー

修了後の進路について

本研究科の修了者は、国際交流がますます進展する時代に必要とされる人材として、教育・研究機関、官公庁、民間企業、国際機関など国内外の広い分野での活躍が期待されています。修了者の具体的な就職先は以下のとおりです。

主な就職先 (過去10年)

政府機関・関係機関 等

- 中央省庁(総務省、外務省)
- 日本学術振興会
- 日本学生支援機構
- 日本貿易振興機構(ジェトロ)
- 自衛隊
- 国会議員

地方自治体

- 地方公務員(宮城県、青森県、栃木県) ※市町村含む
- 教育委員会(福島県)

大学・高等専門学校(研究・教育職)

- 東北大学
- 神戸大学
- 宇都宮大学
- 静岡大学
- 大阪教育大学
- 徳島大学
- 九州大学
- 熊本大学
- 青森公立大学
- 岩手県立大学
- 静岡県立大学
- 東北文化学園大学
- 仙台白百合女子大学
- ノースアジア大学
- 東京工業大学
- 東京理科大学
- 中央大学
- 麗澤大学
- 名城大学
- 西南学院大学
- 沖縄国際大学
- アムステルダム大学(オランダ)
- アナドル大学(トルコ)
- 河北経済貿易大学(中国)
- 広西大学(中国)
- 輔仁大学(台湾)
- 東ヤンゴン大学(ミャンマー)
- グアム大学
- 桜の聖母短期大学
- 秋田工業高等専門学校
- 福島工業高等専門学校

学校教員(高等学校・中学校)

- 公立高等学校
(宮城県、岩手県、山形県、福島県、埼玉県、長崎県)
- 宮城学院中学校・高等学校(宮城県)
- 仙台育英学園高等学校(宮城県)
- 東北生活文化大学高等学校(宮城県)
- 尚絅学院高等学校(宮城県)
- 仙台白百合学園中学・高等学校(宮城県)
- 聖ドミニコ学院高等学校(宮城県)
- 郡山ザベリオ学園

学校教員(その他)

- 仙台イングリッシュセンター
- 仙台国際日本語学校

NPO/NGO/特殊法人

- 東京YWCA
- 日本赤十字社
- 日本赤十字社(宮城県赤十字血液センター)
- せんだいみやぎNPOセンター

民間企業

- (株)東北電力
- JR東日本
- 日本通運
- (株)時事通信社
- (株)大日本印刷
- (株)MOCO
- (株)リクルート
- (株)ドイグロジャパン
- (株)第一エージェンシー
- (株)三菱商事
- (株)大同生命保険
- (株)日立電線
- (株)東北日経広告社
- (株)マンパワー
- (株)荘内銀行
- (株)ダン・タクマ
- (株)ティ・アイ・シー
- (株)ソーネット
- (株)橋本産業
- (株)東洋電機製造
- (株)技術情報協会
- (株)メディアグループ
- (株)ソフトバンクBB
- (株)宇都宮イングリッシュセンター
- (株)ワールドサポート
- (株)東伸精工
- (株)テレウェイヴ
- (株)明治安田システムテクノロジー
- (株)大和証券
- (株)帝国インキ製造
- (株)日本サード・パーティ
- (株)サンエー商会
- (株)ハ・シフィックコンサルタンツインターナショナル
- (株)ピーシーワーク
- (株)プライムアースEVIナジー
- (株)セイコーインスツル(SII)
- (株)ハーン銀行(モンゴル)

奨学金について

大学院での就学を支援するために多くの奨学金制度があります。ここにあげたものは、平成22年度に募集があったものです。この他にも大学を通さずに学生本人が直接応募する奨学金もあります。詳細については本研究科ホームページもご覧ください。

日本人学生向け奨学金

●平成23年度日本人学生の奨学金実績

奨学金名称	支給金額	本研究科採用人数
日本学生支援機構奨学金 第一種奨学金	月額 5万円	1名
	月額 8万8千円	4名
	月額 12万2千円	1名
日本学生支援機構奨学金 第二種(短期留学)奨学金	月額 5万円	1名

外国人留学生向け奨学金

●平成23年度外国人留学生の奨学金実績

奨学金名称	支給金額	本研究科採用人数
平成23年度外国人留学生学習奨励費給付制度	月額6万5千円	13名
公益財団法人サトー国際奨学財団サトーAsia留学生奨学制度 2011年4月期	月額18万円	
(財)ロータリー米山記念財団奨学会2011学年度米山奨学生	月額14万円	2名
(財)綿貫国際奨学財団2011年度奨学生	月額15万円	
平成23年度4月期東北大学外国人留学生総長特別奨学生	検定料、入学料、 授業料相当額	
(財)旭硝子奨学会2011年度外国人留学生奨学生	月額10万円	1名
公益財団法人佐川留学生奨学財団2011年度外国人留学生奨学生	月額10万円	
平成23年度JEES奨学金・検定奨学金奨学生	月額5万円	
平成23年度JEES奨学金・日能奨学金奨学生	月額5万円	
平成23年度JEES奨学金・一般奨学金奨学生	月額3万円	
イオン1%クラブ・イオンスカラシップ2011年度奨学生	授業料及び月額10万円	1名
(財)朝鮮奨学会2011(平成23)年度大学院奨学生	修士:月額4万円 博士:月額7万円	
ライオンズクラブ在仙6クラブ「在仙留学生奨学金」	一括10万円	1名
財団法人国際日本文化研究交流財団平成23年度奨学生	月額12万円	
2011年度KANSAI PAINT SCHOLARSHIP	月額10万円	
東北開発記念財団平成23年度外国人留学生修学援助	月額5万円	1名
(財)亀井記念奨学財団平成23年度外国人留学生奨学生	月額6万円	
2011年度ソーシャルイノベーション奨学(奨励)金	月額8万円または 一括20万円	
財団法人KDDI財団2011年度外国人留学生助成	月額12万円	
(財)仙台国際育友会平成23年度奨学生	一括10万円	1名

Photo Library of GSICS

各種発表会



※写真は修士論文構想発表会の様子

オープンキャンパス



国際交流の集い



※写真は『百人一首』競技かるた実演の様子

講演会



(講師: フランス国立社会科学高等研究員教授
オギュスタン・ベルク氏)

公開講座



※写真はラウンドテーブルの様子

研究科棟





THE GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES

CONTENTS

36	Overview	49	International graduate program in language sciences
37	Message from the Dean	51	"Human security and Society" program
38	Principles and Objectives	53	Theses and Dissertations
39	Admission Policy	55	Statistics: International Students at GSICS
40	The Organization of GSICS, Divisions, Departments	57	Career Prospects / Scholarships
48	LBC Research Center		

Overview



The Graduate School of International Cultural Studies (GSICS)

We at GSICS pursue interdisciplinary research and education in the fields of area studies, interregional relations, and language. We view these elements as the primary foundation of all cultures and the medium for intercultural exchange. Our ultimate goal is to develop outstanding scholars and professionals at the highest level of global competitiveness. The School features a two-year Master's Program and a three-year Doctoral Program.

GSICS was inaugurated in 1993 with the Divisions of Area Studies and Intercultural Relations. We undertook a major expansion in 2001 by adding the Division of Language Studies to enhance an already powerful academic engine. Last year witnessed another reinforcement of GSICS: we founded "The Research Center for Language, Brain and Cognition" as an inter-school institute to further develop the cutting-edge research and education hitherto conducted by the LBC Research Center, one of "The 21st Century COE Programs," that completed its five-year intensive mission last spring. Now, research and education corresponding to the full multiplicity of human society—social, cultural and linguistic—can be carried out among our three major units with a research center as never before.

At GSICS we are committed to making the world safer, wiser, and better. We believe that the most serious issues facing the world today are great, but not insoluble. However, such problems transcend national, ethnic and racial boundaries, and their solutions require a reconstitution of humanity's intellectual framework. Responding to these demands, GSICS promotes comprehensive, interdisciplinary and advanced research and education that goes beyond the scope of existing academic disciplines in the humanities, social and natural sciences. Our foremost mission, accordingly, resides in producing research and training scholars and professionals who might develop the sophisticated expertise and sensitivity necessary to better deal with the complexities of human society today and into the future.

Features of the Graduate School of International Cultural Studies

GSICS Values Creative Minds

GSICS trains scholars and professionals who can formulate novel questions and provide creative solutions to critical issues confronting human beings.

GSICS Aspires to be Globally Competitive

GSICS strives to develop world-class scholars and professionals, through an educational environment that emphasizes firsthand experience and enables students to obtain comprehensive communication skills.

GSICS is Open to the Community and to the World

GSICS welcomes talented people not only from the surrounding community, but from all over the world as well. We support non-traditional students – including those who are returning to school, working full time, and joining us from abroad. We do our best to meet the special needs of every incoming student.

GSICS Welcomes Challengers

GSICS seeks students with a wide range of educational and experiential backgrounds. Beyond this, we seek students who wish to pursue learning in disciplines they may not have had previous training in. We heartily offer guidance and support to those who wish to challenge in new directions.

Message from the Dean



One year has passed since the 2011 Tohoku earthquake and tsunami, and although we experienced the aftermath of this disaster, our graduate program is ready to welcome a new school year.

It is true that damage to our buildings affected our class schedules and research activities. Nevertheless, faculty members and students made a concerted effort to overcome such adverse factors, and our graduate program is almost fully restored.

At the graduate program enrollment ceremony, which was two months after the earthquake, I placed emphasis on why students should continue with their research plans despite the difficulties they may experience and called on them to consider the importance of this research following a historical disaster such as this one. Under these extraordinary circumstances, each person experienced something unique that showed how people pull together and unite as one in such a tragedy. Hence, everyone continues to pursue their research goals while continuing with the regular chores of daily life. In daily life, searching various perspectives on it, a person can accordingly decide which view is the most appropriate and follow through with that view. With this view of daily life, we can continue to pursue our research while keeping harmony with living.

The basic stance of education and research at the Graduate School of International Cultural Studies has an interdisciplinary and comprehensive approach. If I were to use a metaphor, it is like re-painting various objects that we see accordingly to what we believe they are in reality: “Lines” that we believe to exist are in fact absent and we realize the truth that they only exist once one has started to paint. To daringly take “common sense”, which we believe that we all see in the same way presents a new profile. To do so, of course, it is necessary to grind in the basics by imitating the painting style of many foregoers, and when doing so, one will create or find new connections based on the “space” (especially that which is in between multiple objects). This is the interesting and charming attraction of international cultural studies.

For international cultural studies it is important to not limit the meaning of the word “international” to the meaning of the word “nation,” but to focus on the prefix “inter” with a broader meaning. We are promoting state of the art research projects in the three divisions in conjunction with other related research areas: Division of Language Studies, Division of Intercultural Relations, Division of Area Studies.

Renewed emphasis on globalization is long overdue, however, when we face such a word as globalization, that rules the world, we must have the strength to question its actual meaning. The complication and simplification of this world are two sides of the same coin, and people must hold perspectives that allow them to relate to the objective from various angles. For example, Pascal shows a view of humans represented in the “Thinking Reed.” It is the relation between the world and humans, the micro and macro reverse perspectives, which doesn’t cease and the reversal is fuzzy and is viewed as if from afar. In other words, modern humans who can only stagger in front of a large Tsunami are encouraged by this wisdom.

The ultimate purpose of learning is for the achievement of happiness of humans and the whole world. I am truly looking forward to stepping forward with many students who have a strong will by doing something that can only be achieved here and now.

KOBAYASHI Fumio

Dean, Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University

Principles and Objectives

Tohoku University's Graduate School of International Cultural Studies was established in April 1993 as a part of major university-wide reform. In the process, GSICS became one of the university's first independent institutes. The established goal of this institute is to provide education and research – both fundamental and interdisciplinary – on issues of international import, connected with regional cultures, cultural exchange, and language studies. In the process, GSICS hopes to nurture exceptionalism amongst its personnel, enabling faculty, graduates and students, alike, to flourish both inside and outside of Japan in ways that contribute to the advancement of knowledge globally and assist in the furtherance of internationalization.

The progress of large-scale human exchanges beyond nations – evidenced, above all, by the internationalization of economic activities – implicates two essential strands. One is positive: the promotion of mutual understanding amongst the various peoples of the world. The other, oft-times negative, is the serious economic and/or cultural friction engendered between nations and regions during the course of such exchange. These conflicts are due not only to the differences of language and styles of thinking among the peoples of the world, but also, most often, the result of a lack of understanding of local history, culture, religion and nature. Once such differences arise, the resulting tensions are difficult to offset. Unfortunately, still today there appears no end to the up-cropping of ethnic and regional conflict caused by religious and cultural misunderstanding and intolerance.

While the world of the 21st century has become increasingly globalized and borderless, in order for Japan to build high quality international exchange and cooperation, it is of prime importance to nurture researchers and business professionals who possess highly specialized knowledge and a deep appreciation of the problems and implications associated with international exchange. From this standpoint, GSICS offers educational training which strives, in part, to foster creative researchers who refuse to limit themselves to narrow disciplines; at the same time, our aim is to cultivate highly specialized professionals who possess broad international views.

In this global age, where information is a major element of international exchange, various nations of the world have evinced a rapid movement toward cultural and economic unification. Under such conditions, each local or regional culture has developed not only in accord with a particular historical background; its original cultural characteristics have also been transformed by assimilation with other, exogenous cultures. Such assimilated culture might be called “International Culture.” It is the job of faculty and students in GSICS to engage in the study of this entity, international culture, which could be defined as “the academic field which examines the formation, development and exchange of each regional culture in the past, present and future, from the perspective of comprehensive, interdisciplinary convergence.”

As many have noted, the definition of culture is highly amorphous, embracing history, society, nature, science, technology, economic activity, education and lifestyle, as well as language, religion, ideas, literature and the arts. Because of such complexity, the Graduate School of International Cultural Studies often approaches the subject from the opposite direction: striving to capture and understand culture by investigating how problems in the various disciplines influence ways of life and patterns of behavior of people who are living in various regions of the world. In so doing, GSICS teaching and research also demonstrates how such problems account for cultural diversity and uniqueness, as well as universality and similarity. As can be intuited, research on international culture is multi-layered and complex. For this reason, it requires new ways of thinking and academic approaches which move beyond the traditional frameworks, methods and concepts of the traditional, individualized, specialized fields that have so long reigned in the liberal arts, the social and natural sciences.

“International Culture” research, as an academic discipline, is but the initial stage of intellectual development for those housed at GSICS. Our graduate school is determined to fulfill its aim of establishing a new academic discipline capable of grappling with an ever-changing milieu of international culture. We seek to do so with accuracy and fairness; by cultivating theoretical frameworks which are scientific, yet able to deal reliably with a variety of practical issues raised daily by the spread of international culture. Behind our effort is the hope of solving environmental and resource problems, moving toward permanent peace and the coexistence of social groups, and instilling mutual understanding between different cultures. At the heart of our endeavor is the amicable resolution of tensions between regional and local cultures, peoples speaking diverse languages, inhabiting variegated social structures, and engaging in various social practices, as the world moves – collectively and interdependently – ever deeper into the 21st century.





Admission Policy

Today, most of the problems facing our society have been revealed to be complex entities, in which various factors such as regions, borders, ethnic groups, religions, race, and gender have become intertwined, if not entangled. In order to solve such problems, it is essential not only to have academic research based upon traditional frameworks, but also new, fresh educational approaches and research paradigms based upon synthetic and interdisciplinary ways of seeing; ones aimed at complementing already established perspectives. Tohoku University's Graduate School of International Cultural Studies offers such a dualistic program of research and education. It consists of three divisions:

- 1 “Area Studies” – which illuminates cultures in every region of the world, and details the characteristics of societies contained therein;**
- 2 “Intercultural Relations” – which explores the ways in which language, economy, and technology contribute to societal and cultural development and exchange, from a point of view that fuses the humanities and natural sciences; and**
- 3 “Language Studies” – which strives for profound understanding of the multiple, complex relationships between language, culture, education and society, utilizing an advanced level of foreign language ability.**

GSICS, in short, features a comprehensive, interdisciplinary and pioneering educational research organization which transcends the bounds of traditional academic disciplines in the humanities, social and natural sciences. GSICS interdisciplinary education and research seeks comprehensive understanding of a variety of issues associated with language, culture and society in every region of the world; GSICS pays particular attention to international exchange between all regions and emphasizes the multiple processes of globalization worldwide; GSICS is also committed to understanding and working to solve various problems of contemporary human society. Via these educational and scholarly practices, GSICS pursues the following research/educational goals. First, it aims at nurturing students who can move out into the world armed with high ideals, assisting them in contributing to the successful development of human civilization and culture. Associated with this, and secondly, GSICS seeks to merge highly professionalized knowledge with a sense among students and faculty of “internationality”. Finally, GSICS seeks to instill a spirit of activation among the professionals and researchers who walk its halls, assisting graduates to solve the many complex problems of contemporary internationalizing society, both here in Japan, and abroad.

GSICS seeks talented individuals who would enthusiastically embrace and embody this philosophy. Our graduate school is proud of its “open-door policy”: it is an institution not only for those young women and men who have graduated or will graduate from Japanese Universities; it is also for people of all ages and ethnic backgrounds, from countries all around the world. GSICS is especially for those exceptional people who are or wish to be active in the front lines of society, no matter their nation of origin, gender or age. This institute seeks students who possess an open, objective consciousness, who wish to become creative researchers or highly specialized professionals, who yearn to be active on the international scene, and who possess flexible thinking, a broad point of view, and not inconsiderable language abilities.

Divisions and Departments



DIVISION OF AREA STUDIES

- Department of Asian Cultural Studies
- Department of European Cultural Studies
- Department of American Studies
- Department of Islamic Area Studies
- Department of Comparative Cultural Studies



DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

- Department of Linguistic Communication
- Department of International Economic Relations
- Department of Science and Technology
- Department of Interregional Environmental System
- Department of Intercultural and Interlingual Relations
- Department of Cross-Cultural Education
- Department of International Resources Policy



DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

- Department of Theoretical Linguistics
- Department of Multi-Cultural Societies
- Department of Cultural Uses of Language
- Department of Language Education



RESEARCH CENTER FOR LANGUAGE, BRAIN AND COGNITION

Academic Divisions and Departments

DIVISION OF AREA STUDIES

The underlying premise of this division is to treat “international culture” as divisible into four geographical and intellectual “spaces”: Asia, Europe, America and Islam. We aim at identifying the characteristics of the societies, regions and cultures associated with these spaces. Each department is engaged in specific area studies necessary to achieve this objective; yet the purpose of the entire division is to pursue comprehensive and organic research that emphasizes comparative aspects. For students an educational foundation is provided which enables them to acquire focused perspectives and methods in specific areas and cultures, while also gaining a more integrated understanding of the interrelationships between cultures and spaces.

Department of Asian Cultural Studies

Asia is one of the most important cultural and economic pillars in the world. In order to obtain perspectives on its rapid change, Department of Asian Cultural Studies conducts research and provides education that seeks to understand characteristics of East Asian culture with an emphasis on the thought, religion and literature of China, Korea and Japan.

■ **Ishikawa, Hidemi** Professor

The formation of Japanese culture

■ **Katsuyama, Minoru** Associate Professor

East Asian literature

■ **Sano, Masato** Associate Professor

The evolution of Japanese culture

Department of European Cultural Studies

Although European culture consists of diversified elements, it retains a uniformity based on classic Greco-Roman and Christian culture. European cultural studies, therefore, must be pursued from both a historical and comprehensive viewpoint, dealing with autonomous academic fields such as literature, philosophy, history and law. Based on this principle, the character of the Department of European Cultural Studies lies in this attempt to clarify the core realities of European culture comprehensively.

■ **Kobayashi, Fumio** Professor

Modern French Literature and Critical Theory

■ **Nunota, Tsutomu** Professor

Constitutional Law

■ **Sato, Toru** Professor

Phenomenology and Philosophical Studies of Time

■ **Teramoto, Naruhiko** Professor

French Literature (Lautréamont),
Literature and Movie

■ **Nomura, Keisuke** Associate Professor

The Modern History of France

Department of American Studies

The Department of American Studies pursues research on and education about the culture, society and history of the United States of America from an interdisciplinary perspective. In other words, it aims at research and education covering multiple disciplines beyond the framework of existing atomized academic specializations. Emphasis is placed on practical research methods (including sociological surveys, statistical analyses, and field work) and joint collaboration with specialists in other academic fields and from other countries.

■ **Takenaka, Koji** Professor

American Social History, African-American History

■ **Obara, Toyoshi** Associate Professor

American Political History

■ **Sawairi, Yoji** Associate Professor

Comparative Culture and Literature; American Culture

Department of Islamic Area Studies

The Department of Islamic Area Studies focuses mainly on the Middle East and the Islamic Eurasia which have become an epicenter of global dynamism for decades. We emphasize multi-methodological perspectives and approaches, and try to understand the area as a complex entity, by combining various aspects of local history, politics, economy, society and culture.

■ Kuroda, Takashi Professor

Modern History of the Middle East and Iran

■ Okawara, Tomoki Associate Professor

Arabic and Middle Eastern Studies (Social History)

■ Sawae, Fumiko Associate Professor

Modern Turkish Studies (Comparative Politics)

Department of Comparative Cultural Studies

Comparative Cultural Studies are designed to understand the nature of Japan and the Japanese more deeply. Many aspects of local culture can be observed which were directly imported or else developed through transformation. Comparative cultural studies looks for these elements by examining relations between cultures all over the world. Specific cultures for study are chosen from both the past and present. Actual research is conducted on such matters as the various phases of culture, genres in the arts and other human expression.

■ Fujita, Midori Professor

Comparative Literature and Culture, African Studies

■ Fujita, Kyoko Professor

Comparative Culture and Literature, German and Austrian Culture and Literature; East European Studies

■ Sawairi, Yoji Associate Professor

Comparative Culture and Literature, American Culture

■ Sakamaki, Koji Associate Professor

Comparative Culture and Literature, French Literature



Master's Program

Markus Maliranta (Department of Comparative Cultural Studies)

I have been enrolled in the graduate school for approximately one year. As an undergraduate student, I was worried about whether I could enter into a graduate school, but I had a strong desire to do so, hence I chose to enter the Department of Comparative Cultural Studies for one year. There are students from various countries in this department so discussions are lively and very rewarding. There are notable differences that are evident in various cultures that are natural. I have been able to understand these differences and have developed a better understanding of the Japanese culture and other cultures through studies in this department.



Doctoral Program

Shihomi Meguro (Department of American Studies)

I worked for a TV station in the news room for seven years, but I wanted to do further studies so I entered this graduate school. My thesis work is on the history of Fra which is the traditional dancing of Hawaii. Various teachers and seniors studying this area came to the Department of American Studies and they instruct us eagerly. Meanwhile, a study is not at all dependent on one's individual efforts, but becomes a realization when we work with other people who come from various countries.

Academic Divisions and Departments

DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

The general objective of this division is to clarify the fundamental processes underlying and phenomena engendered by the variegated activities associated with cultural integration. We do this by systematically inter-relating the “soft elements” of culture (represented by the patterns of human thought, behavior, and cultural activity primarily manifested in language) with the “hard elements” of society (represented by international economic relations, cooperation in the development and utilization of technology, and resource development). For such purposes, the division is composed of diversified departments that deal with linguistics, economics, technology, and resources. Our wide-ranging curriculum provides students with a thorough understanding of international cooperation, from a variety of vectors.

Department of Linguistic Communication

The aim of this department is to promote mutual understanding and expand cultural interchange, through the application of pragmatics, linguistic typology, cognitive linguistics, psycholinguistics, and translation theory. It does this by pursuing various comparative studies concerning the possible means of linguistic communication among groups of people having different cultures and languages. Different means of transmission, different cultural backgrounds and social institutions, and differences in era and generation are all known to influence linguistic communication and, therefore, provide focal points for study.

■ **Ono, Naoyuki** Professor

Semantics, English Linguistics

■ **Nakamoto, Takeshi** Associate Professor

Romance Linguistics, Syntax, Pragmatics

■ **Narrog, Heiko** Associate Professor

Japanese Linguistics, Linguistic Typology

Department of International Economic Relations

The globalization of the Japanese economy has created a complex economic interdependency between Japan and the other major world economies. In order to understand this interdependency and arrive at a proper interpretation from a wide variety of viewpoints, this department pursues comprehensive international economic analyses of matters such as international trade, direct foreign investment, and localization of foreign firms. The results of these analyses help clarify the present status and current issues of the world economy.

■ **Yokokawa, Kazuo** Professor

International Macroeconomics

■ **Daitoh, Ichiroh** Associate Professor

International Economics and Economic Development

■ **HU, Yunfang** Associate Professor

International Economics and Economic Growth

■ **Yanase, Akihiko** Associate Professor

International Economics and Public Policy

Department of Science and Technology

Scientific and technological civilization started when humankind was first equipped with tools. As technology advances, humankind exploited acceleratingly terrestrial resources and developed society resulting to environmental damages. This department undertakes interdisciplinary researches on such multiple aspects of science and technology, beyond established academic frameworks, over time and across borders. For example, archaeology reconstructs early iron technology based on archaeometallurgy, analyzing iron artifacts and iron production sites. In modern times, environmental and urban engineering, and industrial economics use various approaches to solve urban and environmental issues and reconstruct environmental and industrial system in order to use resources effectively. This department is characterized by the application of unique methodologies based on cross border approaches to Archaeology, Urban engineering, and Economics.

■ **Fukasawa, Yuriko** Professor

Archaeology

■ **Ye, Gang** Professor

Economics of Industry, Developmental Economics

Department of Interregional Environmental System

Environmental problems enter the critical phase that threatens not only the human race and the ecosystem but also the entire world of nature. The present situation is not solely the outcome of the failure of environmental technology. It is deeply rooted in the problems related to our culture and society. An important task here is to clarify the social, economic and cultural problems that cause this state of affairs and to reconstruct the system of our life and the way of thinking fundamentally. Environmental policies to tackle the issues should be planned and implemented interregionally from an encompassing perspective of the entire civilization of the human race.

It is evident that environmental study should be something to be established in strategic collaboration and networking of varied research methodologies.

From this standpoint, our department pursues the interdisciplinary study of the construction of environmentally preferable social system on an interregional basis, focusing upon such subjects as eco-philosophy, social system, environmental conservation, resource-recycling, and waste management.

■ Yamashita, Hiroshi Professor

Ecophilosophy and Deep Ecological Thoughts in Asian Traditions, Area Studies (South Asia)

■ Yu, Jeong-Soo Associate Professor

Urban and Environmental Policy, Recycling-Oriented Social System

■ Aoki, Toshiaki Associate Professor

Environmental psychology, regional policy for sustainable development, city planning

Department of Intercultural and Interlingual Relations

The department focuses on studies of intercultural and interlingual relations in various parts of the world from the perspectives of correlation and contrast. In particular, by emphasizing the analysis of

Japanese and Asian linguistic cultures, and by identifying linguistic contact, influence, reception and education, comprehensive intercultural and interlingual study can be vigorously pursued.

■ Sato, Sekiko Professor (Joint)

History of Japanese Thoughts, Japanese Education

■ Uehara, Satoshi Professor (Joint)

Cognitive Linguistics, Linguistic Typology, Japanese Linguistics, Pragmatics

■ Nagatomo, Masami Professor

Sociolinguistics, The History of the German Students and Students Songs, The German Elements in the North American Continent

■ Eto, Hiroyuki Associate Professor

Intellectual History of Linguistics, Historical Semantics of English, Language and Liberal Arts Education

Department of Cross-Cultural Education

The Department of Cross-cultural Education encourages contrastive linguistic studies of Japanese and other languages and concentrates on the following three research areas:

1) A linguistic study of natural languages, particularly Japanese, from the perspectives of human cognition, and language function and communication, based on recent findings in the fields of Cognitive Linguistics, Contrastive Linguistics, Linguistic Typology, Computational Linguistics, and Formal Semantics.

2) Construction of language-learning process models/systems for those acquiring Japanese as a second language, based on Contrastive and Cognitive Linguistic Studies of Japanese and other languages.

3) Exploration of the Interface between Linguistic Theories (Cognitive Linguistics, Formal Grammar) and Brain Function Studies. As such, this department serves as a core research unit in the 21st Century Center of Excellence Program, entitled "A Strategic Research and Education Center for an Integrated Approach to Language and Cognition" (October 2002~March 2007).

■ Yoshimoto, Kei Professor (Joint)

Linguistic Cognitive Science, Japanese Grammar, Foreign (Joint) Language Acquisition and Education

■ Kitahara, Yoshio Associate Professor (Joint)

English Linguistics, Linguistics

■ Nakamura, Wataru Associate Professor (Joint)

Functional Linguistics; Linguistic Typology, Language Acquisition, Cognitive Linguistics

■ Sugaya, Natsue Associate Professor (Joint)

Second Language Acquisition, Teaching Japanese as a Foreign/Second Language

Academic Divisions and Departments

Department of International Resources Policy

This department pursues unique research and education based on a combination of methodologies from engineering, economics and sociology to identify international policies for the development and utilization of resources while protecting the environment. The approach is comprised of quantitative analysis of resource utilization for sustainable human development, as well as identification of policy measures to alleviate the related problems. From April, 2006 this department collaborated with “International Post-Graduate Program in Human Security” and started to carry out research and education on influence of resources and environment on social security.

■ Shigeno, Yoshihito Professor

Environmental Technology and Policy,
Structural Analysis of Industrial Technology

■ Pushparal, Dinil Professor

Environment Design Engineering, Materials Science

■ Fuyuki, Katsuhito Associate Professor (Joint)

Food Economics, Theory of Agribusiness

■ Kitani, Shinobu Associate Professor (Joint)

Environmental Education



Master's Program

Courtney Fitzgerald (Department of Linguistic Communication)

This department provides a student many areas to study. Because I study various areas of linguistics in Japanese, I interact with Japanese students and also other international students hence I can reflect on various experiences, cultures, and interests I have in relation to the deep study of grammar and semantics. The classes provide viewpoints of different areas within the domain of Linguistics. My major area that I have benefitted from in studying pragmatics and typology is the study of Cranial Nerve Science in relation to these areas.



Doctoral Program

Wenyu Zhang (Department of International Resources Policy)

Since The 21st Century global warming and other environmental issues are highly recognized by mankind. To maintain sustainable society keeping in harmony with nature, mankind must utilize knowledge about technical power that is available.

The Department of International Resources Policy provides this platform. Under the wide discipline and the instruction of the various professors, I worked on an environmental problem with social science and knowledge and a technique of the natural science fusion. I think that it is an attractive department for a person intending to open up to the future in these times to make much of environmental conservation more and more.

DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

The Division focuses on developing talent who take an active part in the 21st century. Our vision is to create internationally-minded professionals who have full-fledged language facility, originality, creativity, and comprehensive perspectives concerning multi-lingual and multi-cultural societies.

In accord with these aims, the Division consists of five distinctive departments that, respectively, specialize in: (1) the generation of language, (2) language systems, (3) language use, (4) multi-lingual and multi-cultural societies, and (5) language education. The Division prides itself in providing educational programs that produce specialists in an array of international activities, as well as pioneers in a new decade.

Department of Theoretical Linguistics

This department is concerned with linguistic competence of human beings and the nature of Language. First, we carefully observe a variety of linguistic facts in particular languages such as Japanese and English, and then try to explain them by making theoretical hypotheses about the properties of the mental organ of Language, so as to contribute to the general theory of Language. Moreover, we also aim at understanding various aspects of dynamic language uses in the contemporary society. Through these enterprises, we try to unlock the mystery of linguistic competence.

■ **Kawahira, Yoshio** Professor

English Linguistics, Theory of Semantic Interpretation

■ **Yamada, Makoto** Professor

English Syntax, Generative Grammar

■ **Takahashi, Daiko** Associate Professor

Linguistics, Syntactic Theory

■ **Asakawa, Teruo** Professor (Joint)

English Linguistics, Semantics

Department of Multi-Cultural Societies

In 2009, with the aim of broadening our range to study more comprehensively the plurality of cultures in the world, the Department of Multi-Cultural Studies was reorganized into the new Department of Multi-Cultural Studies. Focusing on cultural plurality, researchers in the fields of sociology, anthropology, cross-cultural studies, and ecocriticism work together here to teach as well as pursue interdisciplinary studies, which have never been more significant in the area of humanities. Beyond so-called cultural studies, which have sometimes been criticized for employing a simple crossover style of research, we propose to deepen and sharpen the fundamental analysis of the “text” in a broader sense (i.e. almost every kind of sign we perceive in our life), on the firm basis of a scrupulous examination and comprehension of cultural pluralism.

■ **Ishihata, Naoki** Professor

Ecocriticism

■ **Holden, Todd** Professor

Interdisciplinary Social Science, Media and Communication Studies, Research Methodology

■ **Suzuki, Michio** Professor

Comparative Cultural Studies and German Literature

■ **Yoshida, Shigeto** Associate Professor

Cultural Anthropology, Cultural Discourse

■ **Sato, Yukino** Associate Professor

Central European Area Studies;
Czechoslovak History, Nationalism

Department of Cultural Uses of Language

“Cultural Uses of Language” refers to a comprehensive study of language, culture and literature as a complex form, one linked to human spiritual activity. Going beyond the traditional, narrow framework of genre study, we aim at interdisciplinary and pragmatic research, especially in terms of “mode,” “dynamics,” “space,” and “figure.” As long as it is related to the aspects mentioned above, any topic or research interest proposed by a student can become a study theme in this department. Also, we lay stress on the efficiency of practical foreign languages.

■ **Suzuki, Mitsuko** Professor

19th Century English Literature

■ **Sato, Ken-ichi** Professor

18th Century German Literature and Drama

■ **Ichikawa, Mariko** Professor

English Renaissance Drama

■ **Sugiura, Kensuke** Professor

DaF, CALL, e-Learning

Academic Divisions and Departments

Department of Language Education

In an era of globalization, languages play a more crucial role in our lives than ever before. It is imperative for societies throughout the globe to provide language education appropriate to such needs. This department aims at training language educators and researchers who are able to take leadership in this endeavor. A wide range of issues concerning the learning and teaching of English, Japanese, Spanish and other languages, as well, are addressed in the fields of language acquisition, language education policy, curriculum formation, methodology, evaluation, and application of multimedia technology, among others. Due attention is also accorded to the particularity and commonality which each language possesses.

■ Shigaki, Mitsuhiro Professor

Language Education

■ Okada, Takeshi Professor

English Corpus Studies; English Syntax, Computer-Assisted Language Learning (CALL)

■ Wanner, Peter John Associate Professor

Psycholinguistics, Second Language Acquisition Theories, Bilingual Education

Doctoral Program

Xiaoyun Qiu (Department of Language Education)

This department strives to gather the best researchers. The members of this department consisted of a good international mixture. We had Japanese, Chinese, Romanian, and American students who were really international. We had a sense of a global community. I worked together with teachers of competing ideas, such as "how friends have a variety of teaching technique," in various languages. I was very stimulating and felt a broad outlook on life.



Doctoral Program

Chun Hua (Department of Multi-Cultural Societies)

My name is Chun Hua and I have been in the Department of Multi-Cultural Societies that started in 2009. There are two foreign students from Mongolia in this international department besides myself I came from China and we are fortunate to have two Japanese students registered as well.

This research room has equipment and documents available to help one pursue their research easily. All students in this department try to group some meaningful aspect of culture where more than one culture exists. I have learned and developed new methods of doing research because of my interaction with other researchers in this department.

In this department I discuss various themes of proposals by other students in the course and hence I am very eager to carry out my own research work. I learn many useful things from my instructors and greatly appreciate their help. I encourage you to visit this invigorating department.

RESEARCH CENTER FOR LANGUAGE, BRAIN AND COGNITION

Invitation to Integrated Science of Language, Brain and Cognition

Following a successful government-sponsored five-year 21st Center of Excellence (COE) research project, the Research Center for Language, Brain and Cognition (LBC) was established in April 2007. The LBC is an intra-university institute aimed at utilizing and enriching the academic heritage of the COE project, continuing a multi-disciplinary approach to understanding the biological nature of human language.

It has long been a mystery how different areas of the brain function when human beings comprehend and produce language. Previously, language function in the brain was considered an impermeable “black box”. However, during the last ten or so years, non-invasive brain function techniques, such as functional Magnetic Resonance Imaging (fMRI) and Magnetoencephalography (MEG), have made it possible for us to see which parts of the brain are activated when we are engaged in language processing. The LBC Center aims to uncover the language mechanism in the brain, which has been hitherto considered a mysterious “black box”.

The LBC Center consists of researchers with various linguistic backgrounds as its core, supported by researchers from other disciplines, such as brain sciences, psychology, and information sciences. In addition to devoting itself to research, the LBC Center collaborates with the GSICS in conducting an MA program, the ‘International Graduate Program in Language Sciences’, which is conducted entirely in English. Through this program the LBC Center commits itself to functioning as an educational institute as well. As part of educational activities, the LBC Center regularly conducts colloquiums, public lectures, and both domestic and international symposia on various topics of language sciences; and these events are widely open to the general public.

Names	Areas of Specialization	Ph.D. Degrees
Kei Yoshimoto (Director)	Computational Linguistics	University of Stuttgart
Yoichi Iwasaki	Cognitive Psychology	Fukushima University
Hiroshi Yamashita	Epistemology	University of Madras
Satoshi Uehara	Cognitive Linguistics	University of Michigan
Naoyuki Ono	Semantics	Kobe University
Masatoshi Koizumi	Psycholinguistics	MIT
Toshiaki Muramoto	Educational Psychology	Hokkaido University
Daiko Takahashi	Theoretical Linguistics	University of Connecticut
Heiko Narrog	Cognitive Linguistics	Ruhr University
Hiroyuki Eto	Sociolinguistics	Georgetown University
Peter John Wanner	Language Acquisition	Nagoya University
Takeshi Nakamoto	Theoretical Linguistics	Universite de MonsHainaut
Satoru Yokoyama	Neurolinguistics	Tohoku University
Tadao Miyamoto	Psycholinguistics	University of Victoria

INTERNATIONAL GRADUATE PROGRAM IN LANGUAGE SCIENCES

In 2011, the Graduate School of International Cultural Studies (GSICS) and Research Center for Language, Brain and Cognition (LBC Center) launched a new graduate program conducted entirely in English. This program focuses on the enhancement of our understanding of the interrelationship between language, brain and cognition.

The aim of this program is to promote interdisciplinary education and research concerning human language from multiple perspectives of linguistics, psychology, brain science and information science. Based on recent development in linguistics and its related disciplines, the program seeks to obtain comprehensive understanding of such human language related issues as processing, acquisition and loss, communication, and cerebral function.



The program is conducted in collaboration with the LBC Center, which is affiliated with the GSICS.

INTERNATIONAL GRADUATE PROGRAM IN LANGUAGE SCIENCES

Curriculum and Teaching Staff

Syntax 1	Daiko Takahashi	Ph.D. University of Connecticut, U.S.A.
Syntax 2	Makoto Yamada	Ph.D. Tohoku University, Japan
Semantics 1	Naoyuki Ono	Ph.D. Kobe University, Japan
Semantics 2	Kei Yoshimoto	Ph.D. University of Stuttgart, Germany
Functional Linguistics	Wataru Nakamura	Ph.D. S.U.N.Y. at Baffalo, U.S.A.
Cognitive Linguistics	Satoshi Uehara	Ph.D. University of Michigan, U.S.A.
Psycholinguistics	T.B.A.	
Language Acquisition	Peter John Wanner	Ph.D. Nagoya University, Japan
Language and Society	Hiroyuki Eto	Ph.D. Georgetown University, U.S.A.
Typology of Language	Heiko Narrog	Ph.D. Ruhr University, Bochum, Germany
Neurolinguistics	T.B.A.	



Dr. Naoyuki Ono



Dr. Hiroyuki Eto



Dr. Heiko Narrog



Dr. Daiko Takahashi

Admission Schedule

Admission to the Master's program: October 1

Application deadline: May 18

Notification of results: June 20

For more information, check our website at <http://www.intcul.tohoku.ac.jp/>.

Contact Information

The Office of Academic Affairs, The Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University

41 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980-8576, Japan.

Fax: +81-22-795-7583 E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

The International Graduate Program in Language Sciences is conducted as part of the Future Global Leadership at Tohoku University. Check the following website for more information:

http://www.fgl.tohoku.ac.jp/grad_std/index.shtml

"HUMAN SECURITY AND SOCIETY" PROGRAM

This program performs all of education instruction including the class in English. In addition, at the entrance to school time, it is April and October.

■ Aim

"The International Joint Educational Program of Human Security", which started in April 2005, is a program jointly designed by four Graduate Schools of Tohoku University: the Graduate School of Agricultural Science, the Graduate School of Medicine, the Graduate School of International Cultural Studies and the Graduate School of Environmental Studies. The purpose of this program is to make intellectual contributions to the realization of Human Security throughout the world.

In this joint program, the Graduate School of International Cultural Studies (GSICS) focuses on "Human Security and Society." GSICS provides research and education on a range of human security issues concerning people and society. We believe that the most serious issues facing the world today are great, but not insoluble. However, such problems transcend national, ethnic and racial boundaries, and their solutions require a reconstitution of humanity's intellectual framework. We must develop a deeper and wider understanding for the social dimension of human-beings suffering around the world, in a way which guarantees the growth of civil society and promotes minimum standards of human rights, economic and technological development, gender equality and so on.

[Program Description]



The Human Security Program is composed of 4 sub-programs: "Human Security and Food & Agriculture," "Human Security and Public Health," "Human Security and Society" and "Human Security and Environment." They are under the administration of the Graduate School of Agriculture, the Graduate School of Medicine, the Graduate School of International Cultural Studies, and the Graduate School of Environment, respectively. They provide curricula for understanding intricate structure of various problems spreading to the areas of Food, Health, Regional Community and Environment.

Society:

Research and education concerning the topics of individual social security problem on the level of daily lives affected by human right, gender, conflict, refugee, and researching how the social security would be established in the changing situation of environments surrounding states and citizens.

Environment:

Research and education on method of settlement and influence of environmental changes in water resources, forest, and climate on the individual and social lives, caused by natural phenomenon and human activities.

Food & Agriculture:

Research and education on the individual security for foods, for example, security of food supply, economic development and food diversification, quality of food, and administration of food resources and nationalism.

Public Health:

Research and education on preventable death events, as well as social systems in their back ground, such as infectious diseases, chemical hazards, disasters, medical injuries, etc.

【Degree】

Students of the Human Security Program belong to one of the 4 Graduate Schools. After satisfying the requirements of the Human Security Program, students are conferred the following degrees:

Graduate School	Graduate School	Graduate School
International Cultural Studies	Master (International Cultural Studies)	Doctor (International Cultural Studies)
	Master (Interdisciplinary Studies)	Doctor (PhD)
Environmental Studies	Master (Environmental Studies)	Doctor (Environmental Studies)
	Master (Interdisciplinary Studies)	Doctor (PhD)
Agricultural Science	Master (Agricultural Science)	Doctor (Agricultural Science)
Medicine	Master (Medicine)	

In “Human Security and Society” Program of the GSICS, students of Master’s and Doctoral Programs belong to the Department of International Resources Policy.

■ Curriculum

All courses in the Human Security Program are lectured in English. A minimum of 30 units is required for the Master’s degree.

a Core Subjects (compulsory): 12 units

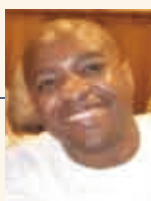
A total of 8 interdisciplinary courses are provided. The four Graduate Schools each provides 2 courses concerning the actual situation and problems of the Human Security.

b Basic and Major Subjects: 14 units

Study for the specialized field in the Graduate School of International Cultural Studies.

c Thesis: 4 units

Individual training in writing of a Master’s thesis under the direction of an academic supervisor.



Doctoral Program

Cremildo Abreu (Department of International Resources Policy)

My name is Cremildo Abreu, I am from Mozambique. I’ve enrolled in the Human Security Program at GSICS in 2011. For me the program is very interesting and challenging. Through a multidisciplinary approach I could understand so much about security centered on people especially regarding to my main research topic which is refugees. One other aspect that I really enjoy in the program, is the opportunity to meet and interact with people from all over the world and get to know different cultures and learn about places that I didn’t know they exist.

I believe that this is one of the best International Post-Graduate Program in Japan and anyone who wishes to study abroad not only would learn and develop academic skill, but also would enjoy living in Japan.



Master’s Program

Tran Thi Diem Thi (Department of International Resources Policy)

My name is Tran Thi Diem Thi and I am from Vietnam. This is my second year as a master student in the Human Security Program of the Graduate School of International Cultural Studies. The support I have to pursue my various passions is something I treasure about this program. My research has been supported by all the professors, and, even more importantly, by amazing human resources of my colleagues. In addition to my research, I love teaching and mentoring, and have had the opportunity to be involved with this in several venues, formal and informal. For example, I have been able to work as a Teaching Assistant both International Resources and Policies lab course as well as undergraduate English classes.

The great thing about this Human Security program is the wide range of opportunities it has to offer, not only academically, but in research and student groups as well. In addition, the Human Security community, including faculty and student groups, always has its door open for you to find your place and make your mark. For now, I will try to gain the tools necessary to make a difference in the future. It has been a great honor and experience for me to be involved in this program.

Master's Thesis Titles (2011)

DIVISION OF AREA STUDIES

Department of American Studies

- Public Enemy as "Black CNN": HipHop Cultural Politics
- Quest for Self in Writing: Paul Auster's The Invention of Solitude
- Rethinking Betty Friedan: The Activities as a Jewish Left-wing Journalist
- Nabokov's Lolita: Paying Attention to the Narrator's Blended Voices

Department of Comparative Cultural Studies

- Herbert George Ponting and His Photographs of Meiji Japan: People, Landscapes and Townscapes Captured in 1903



DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

Department of Linguistic Communication

- A Cognitive Semantic Study on the Involvement in Japanese Indirect Passives
- A Study of grammaticalization of path verbs in Japanese and Chinese

Department of International Economic Relations

- Trade Liberalization and Environmental Policy: A Heckscher-Ohlin Approach
- Effectiveness Analysis of China's Monetary Policy: A VAR Approach
- Tourism and Environmental Pollution in a small Open Economy

Department of Science and Technology

- The term structure of interest rates in China: The impact of monetary policy

Department of Interregional Environmental System

- A Study of immigrant brides and the support system for their social adaptation based on the related policies in Korea and Japan, with special reference to the case of Tsuruoka City, Yamagata Prefecture
- The analysis of Present state on the ELV(End-of Life Vehicle) Recycling in Kokuryoko Province, China
- Comparative Research on Promotion of Used Auto Parts Utilization between Japan and China

Department of Intercultural and Interlingual Relations

- Towards Categorization of Modality of Negations at the End of Sentences in Modern Japanese: Analyzing Data from the Online Retrieval System of Diet Minutes
- Schemata and Strategies of Topic Selection in Japanese and Chinese: A Contrastive Study Based on the Data of Conversation of the First Meeting
- The Usage of Japanese Conjunctions by Chinese Learners and its Connection with Their First Language
- Introductory Remarks in Opinion Statements: Comparison between Chinese Learners and Japanese Native Speakers

Department of Cross-Cultural Education

- The Comparison of Nasal-Final Syllables in Japanese and Chinese
- The Acquisition of benefactive auxiliary verbs by Chinese learners: Focus on the difference between "-tekureru" and "-temorau"
- Investigating Chinese Learners' Acquisition of Japanese VN Type verbs with Two Chinese characters: From the perspective of independence of VN type verbs with two Chinese characters
- A Cognitive-Typological Study of Motion Expressions in Japanese and Chinese

Department of International Resources Policy

- System Dynamics Analysis for the Forest Stock in China
- System Dynamics Analysis for the Building Waste of China: Focusing the Case of Beijing
- Branding the Chinese Rice: Strategy Building through Japanese Experiences
- Mining Development and its Problems in Mongolia
- Emerging Resource Nationalism in China and its Future: With Particular Attention to Influence on Japan



DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

Department of Theoretical Linguistics

- A Study of Pronominal Proclitics in Romance
- A Study of Sluicing and Cleft in Mongolian: A Comparison with Japanese
- A Study of Argument Ellipsis in Chinese and Japanese
- On Genitive Phrases Related to Nominative-Genitive Conversion in Japanese
- On the Derivation of Relative Clauses in Generative Syntax: A Comparison of Movement and Non-Movement Analyses

Department of Multi-Cultural Societies

- Origin of Environmental Consciousness in Wordsworth's Poems



Doctoral Thesis Titles (2011)

DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS

Department of Linguistic Communication

- Linguistic Constraints on Code Switching of Japanese-Chinese Bilingual Children
- The Change of Translation Norms and Intercultural Communication in Japanese-Korean Translation: A Case Study of Kawabata Yasunari's Snow Country
- A Contrastive study of demonstratives in Japanese, Chinese and Korean

Department of Intercultural and Interlingual Relations

- A Contrastive study of back-channeling in Chinese and Japanese: From the viewpoint of discourse analysis

Department of Cross-Cultural Education

- Projection Model Based Learning and Teaching of Japanese Case Marker-de: An Applied Linguistics Study
- The L1 and L2 acquisition of Korean imperfective aspect: From a Typological and Cognitive Linguistic point of view

Department of International Resources Policy

- Reduction Potentiality of the Environmental Impact of Chinese Cement Industry: Focusing on the Analysis of the CDM Projects and the Issues of Carbon Dioxide Reduction



DIVISION OF LANGUAGE STUDIES

Department of Language Generation

- A Non-Movement Analysis of Sluicing

Department of Language System

- A Semantic Analysis of Chinese Topic Markers

Department of Language Education

- A Study on English Rhythm Acquisition by Adult Native Speakers of Japanese: The Effects of Learning Methods and English Proficiency Levels
- The Pragmatics of Japanese Apologies: On the (Non) Apologetic Functions of gomen, gomen nasai, sumimasen
- A Study on Transliterated Foreign Proper Nouns in Chinese: Toward an Application in Vocabulary Teaching



2012 Admission Statistics

● Master's Program

Academic Divisions	Approved number of students	General Applicants		Applicants with Full-time Jobs		International Applicants	
		Total Applicants	Admitted	Total Applicants	Admitted	Total Applicants	Admitted
Area Studies	15	13	8	1	0	9	4
Intercultural Relations	20	6	4	1	1	16	11
Language Studies	13	4	0	0	0	1	1

● Doctor's Program

Academic Divisions	Approved number of students	General Applicants		International Applicants		Matriculating from GSICS Master's Program	
		Total Applicants	Admitted	Total Applicants	Admitted	Total Applicants	Admitted
Area Studies	11	1	0	0	0	2	2
Intercultural Relations	16	2	0	1	1	2	1
Language Studies	11	1	1	0	0	1	1

Admission by Graduating Institution, 2012

● Master's Program

Graduated from	Total Applicants	Admitted
Tohoku University	0	0
Other National Universities	8	5
Public	2	2
Private	15	6
Overseas	24	15
Other	1	1
Total	50	29

● Doctor's Program

Graduated from	Total Applicants	Admitted
Tohoku University	7	4
Other National Universities	0	0
Public	0	0
Private	1	0
Overseas	2	1
Total	10	5

Enrollment of International Students

Country / Area	Master's Program	Doctoral Program	Research	Total
Azerbaijan	1			1
America	1	1		2
Austria		1		1
Sweden	1			1
Thailand		1		1
Tonga			1	1
Bulgaria			1	1
Vietnam	1			1
Malaysia		1		1
Myanmar			1	1
Mozambique		1		1
Mongolia	2		1	3
Romania		1		1
Korea	3	13		16
Taiwan	4	4		8
China	41	21	18	80
Total	54	44	21	120

Number of Students Studying Abroad

Country / Area	Master's Program	Doctoral Program	Total
America	2	3	5
Australia	0	2	2
Cambodia	0	1	1
Canada	1	0	1
China	0	2	2
Czech	1	0	1
England	1	0	1
France	1	0	1
Germany	1	0	1
Holland	0	2	2
Israel	0	1	1
Iran	1	0	1
Korea	0	1	1
Russia	0	1	1
Taiwan	0	1	1
Turkey	0	1	1
Uzbekistan	0	1	1
Vietnam	1	0	1
Singapore	1	0	1
Total	10	16	26

Career Prospects

In an era of rapid globalization characterized by the acceleration of intercultural exchange, students who complete our graduate program are in great demand, both domestically and abroad. They are expected to play important roles in education and research, in government bureaus, private corporations, research institutes, and international organizations.

Specifically, GSICS graduates can anticipate working in the following capacities:

Educational and research institutions

- Researcher
- Teacher/Professor at schools and universities
- Teacher at Japanese language schools
- Official in charge of foreign students

Government offices and private corporations

- Official in charge of international aid
- Official in charge of economic and cultural exchange
- NGO staff member
- Manager/Staff member in charge of overseas business

International organizations

- Manager/Staff member of international organizations
- Manager/Staff member of international aid organizations

Scholarships

The following table shows scholarships offered to international students. The amount of scholarship and the number of recipients may vary year by year. Check our website for more detailed information.

Scholarships for international students 2011

Name of Scholarship Foundation	Amount of Scholarship	Number of Recipients at GSICS
Japan Student Service Organization (JASSO) Honors Scholarship for Privately Financed Int'l Students	JPY 65,000/mo.	13
Sato Yo International Scholarship Foundation	JPY 180,000/mo.	
Rotary Yoneyama Memorial Foundation Inc.	JPY 140,000/mo.	2
Watanuki Int'l Scholarship Foundation	JPY 150,000/mo.	
Tohoku University President Fellowship	Entrance Exam fee, Admission Fee and Tuition	
Asahi Glass Scholarship Foundation	JPY 100,000/mo.	1
Sagawa Scholarship Foundation	JPY 100,000/mo.	
JEES JLTC Scholarship	JPY 50,000/mo.	
JEES JLPT Scholarship	JPY 50,000/mo.	
JEES Standard Scholarship	JPY 30,000/mo.	
AEON 1% Club AEON Scholarship	Tuition and JPY 10,000/mo.	1
The Korean Scholarship Foundation	M:JPY 40,000/mo. D:JPY 70,000/mo.	
All Sendai Lions Club	JPY 100,000/mo.	1
Int'l Research Exchange F. for Japanese S.	JPY 120,000/mo.	
JEES Kansai Paint Scholarship	JPY 100,000/mo.	
Tohoku Development Memorial Foundation	JPY 50,000/mo.	1
Kamei Memorial Foundation	JPY 60,000/mo.	
Social Innovation Scholarship	JPY 80,000/mo. or JPY 200,000	
KDDI Foundation	JPY 120,000/mo.	
Sendai International Friendship Society	JPY 100,000	1



国際地域文化論専攻

DIVISION OF AREA STUDIES



国際文化交流論専攻

DIVISION OF INTERCULTURAL RELATIONS



国際文化言語論専攻

DIVISION OF LANGUAGE STUDIES



附属言語脳認知
総合科学研究センター

RESEARCH CENTER FOR LANGUAGE,
BRAIN AND COGNITION



GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL
CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY

東北大学大学院 国際文化研究科 教務係

〒980-8576 仙台市青葉区川内41

TEL.022-795-7556 FAX.022-795-7583

e-mail : int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/>

平成24年3月(2012.3)



このパンフレットは「水なし印刷」
により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。